雨降る天に涙した。

津森太壱。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨降る天に涙した。

【Ｎコード】
Ｎ６１４２Ｕ

【作者名】
津森太壱。

【あらすじ】
彼はどこか、なんとなく、ふらりと消えてしまいそうな危うさがあった。ギアはその彼を引き留められる存在になりたいと、幼いながらも思ったものだ。だが彼は消えた。そして帰ってきた。変わっていたのは、その微笑みの在り方。けれども変わらないものもあった。

01 ： おもいで。1（前書き）

ようこそおいでくださりました。
本作はシリーズものの一つでございます。
ほかにもありますシリーズを知らなくとも読めるものにはなっているかとは思いますが、不明点があるかもしれません。
ご注意ください。

01 ： おもいで。1

彼はいつも、なんとなく、危うさを感じさせた。
ふらりと突然いなくなってしまいそうな。
ふっと忽然消えてしまいそうな。
さらりとどこかへ流れてしまいそうな。
そんな危うさが、彼にはいつもあった。
それは彼が、ふとこぼした弱音に、要因があった。

「すごく、寂しくなる……心にぽっかり穴が開いて、どうしようもなく締めつけられて、それで、苦しくなる。温かいものを見ていると、感じていると、どうしても……寂しくて悲しくなるんだ」

彼は弱かった。弱くて、強かった。
彼の強さは、ただ存在していること。
弱かった彼は、苦しみながら存在し続けた。
だからこそ危うかった。
いつ、いなくなってしまうのか。
いつ、消えてしまうのか。
いつ、流されてしまうのか。
彼を引き留められる存在になりたいと、幼いながらも思ったものだ。

「わたしがいても、寂しくて悲しい？」
「そう……だね。きみがいるから、寂しくて悲しくなることもある」

「わたし、そばにいちゃいけないの？」
「いいや。きみがそばにいてくれると、とても、幸せだよ」
それでも悲しくて寂しくなる気持ちは、消えないのだ。
彼はそう言って、微笑んでいた。
「本当に幸せなの？」
「本当。おれは、きみに出逢えて、こうして一緒にいられて、幸せだよ」
彼の微笑みはとても綺麗だった。
けれども。
それからしばらくして、その予感は的中した。
幸せだと笑っていた彼は、涙を流しながら、笑って、姿を消した。

「ギア！」
珍しく名を呼ばれて、ハッとする。

「ぼさっとしてんじゃねえ！　どっかに飛ぶのはあとにしろ！」

怒鳴られて、現状を思い出した。

「すまない」

急いで足許に陣を描き、力を付与させる。前方から迫ってきていた土砂に、力を付与させたことで発動した陣から生まれた障壁を放ち、続けて詠唱すると障壁を維持させた。

少しだけ、息が上がる。急いだ分、粗末なものにするわけにはいかず、それを力で補ったせいだ。

「もっとまともなの作れねぇのか！」

「これが精いっぱいだ！」

「ふざけろ！」

頭ごなしに怒鳴られるも、己れの失態の言い訳にしかならない文句をぶつけるわけにはいかない。それはただの八つ当たりだ。

「風詠、力を維持したまま後退しろ！」

本来それで呼ばれる渾名で呼ばれ、そして向けられた命令に、頷いて少しずつ後退する。

「どうする気だ」

「雷を落とす」

「そんな真似……できるのか？」

「できねぇこと言ってどうすんだ。いいからさっさと後退しろ」

邪魔だ、と弾かれ、しかし集中力の切れかかっている自分では確

かに役に立たないと、悔しく思いながらも一気に後退する。
とたん、雷光が落ち、雷鳴が轟く。
それまでいた場所の地形が変わり、土砂の前に大きな土山ができていた。

「さすが……雷雲の魔導師」
「いいから煙を散らせ。ただでさえ視界が悪ぃんだ」
「わかっている」

周囲を警戒しながら、激しい雨で視界の悪い景色を、睨むように見渡す。雷で燃えたものが上げる煙を、詠唱によって操った風で消した。
土砂崩れは障壁と土山で食いとめられたが、地形が変わったせいで道が消えてしまっている。整備が入るまで、この街道はしばらく使えないだろう。

「ここまでする必要があったのか……？」
「てめぇのせいだろ」
「な……」
「ぼさっとしてやがったのは誰だ」

集中していれば、雷で地形を変える、なんて強硬手段に出なくてもよかった。もっと早くに障壁を作っていれば、土砂もこんなに広がらなかった。
くそ、と心裡で毒づく。
任務遂行中に意識を飛ばしたのは自分だ。責任は自分にある。

「このまま一晩様子を見る。てめぇは城に帰れ」
「わたしも残る！」
「聞こえねぇのか。帰れって、おれは言ってんだよ」

またも邪魔だと弾かれ、その悔しさに拳を強く握る。素直に帰る気にはなれなかった。けれども、残ったとしてもできることはもうない。

「あと、報告はおれがする」
「それくらいわたしが……っ」
「二度も言わせんじゃねぇよ」

ぎらりと睨まれて、その灰褐色の双眸にゾッとする。
一瞬でも恐怖を感じてしまった己れに情けなさを感じながら、けっきょく、その場を離れる選択をした。

視界の悪い中を走りながら、ときおり背後を振り返り、その様子を窺う。
土砂崩れが起きていた天辺を見たとき、ぐらりと揺れるものが目に止まった。

「……っ、雷雲！　第二波だ！」

そう叫んだ瞬間、再び雷光が走り、雷鳴が轟いた。
自分のせいで苛立たせてしまった魔導師が、二度めの強硬手段に出たらしい。あれでは地形が変わっただけでなく、道まで変わることになるだろう。地図が書き直されるかもしれない。
自分がもっとしっかりしていれば、そうはならなかったかもしれない。
そう思うと悔しくて、悔しくて、今さら後悔しても遅いけれども、とにかく悔しくてならなかった。
走り続けて視界がいくらかよくなったところで、詠唱で風を操り、身体を宙に浮かせて空へ舞い上がる。そのまま真っ直ぐ、今度は振

り返ることなく、帰還した。

ずぶ濡れの状態で帰還すると、魔導師団長ロルガルーンを始めとした長たちが待ち構えていた。

「被害はどうじゃ」

ロルガルーンに問われ、跪いて現状を答える。

「雷雲が食いとめました。ですが、あの道はもう……」

「聞こえたわ。派手にやらかしたようじゃな」

「申し訳ありません。わたしが、もっとちゃんとしていれば……っ」

「よい。なにか思うことがあったのじゃろ。あれのことは気にするな」

「申し訳ありません……っ」

情けなさに、涙が滲む。泣いてもどうしようもないのに、泣きたくなる。

「もうよい、休め。報告はあれから聞こう」

だいじょうぶだと、慰められるように頭を撫でられて、その優しさに唇を噛みしめながら言葉に甘んじさせてもらった。

01 ： おもいで。1（後書き）

【魔導師のユメみたセカイ。】シリーズにあります【あなたと生きたいと思うのです。】の脇役が、主人公のひとりとして登場します。楽しんでいただければ幸いです。

02 ： おもいで。2

天候の差が激しく、自然災害の多いユシュベル王国で、魔導師はそれらから国を護るべく存在している。
ギア・チェリングは、そのユシュベル王国で、風詠（ふうえい）の魔導師と渾名される魔導師である。

「あ、風詠！」

一週間も降り続いた雨が止んだその日の明け方、休めと言われても眠れずにいたギアは、名を呼ばれて腰かけていた廊下の椅子から立ち上がった。

昨夜、王都近くの街道の土砂崩れから街を護るべくして派遣されたギアだったが、ひとりでは手に負えない状況になり、雷雲の魔導師ロザヴィンを応援に寄越されていた。しかし、ふと集中力を切らせてしまったギアは、最後まで任務をまっとうすることができなかった。最後まで残ったのは、ロザヴィンである。

「雷雲が戻った！　広間だ！」
「雷雲が……」

ギアは疲れた身体を無視して、ロザヴィンが戻ったという場所へ走った。
ひどい雨が続いていたので、呼応する災害を想定して、魔導師団

棟の広間には師団長を始めとした王城内の長たちが詰めている。そこへ飛びこむのは、ふだんであればやらないことだが、事態が事態なだけにギアには余裕がなく、気づけば扉を叩くようにして開けていた。

「雷雲……」

帰ってきたばかりの様子のロザヴィンは、ずぶ濡れなうえに泥まみれだった。師団長への報告は済ませたようで、ギアが入室すると振り向き、不機嫌そうな顔をする。その顔には血が滲んでいた。

「怪我……した、のか」
「ほっとけ」
「手当てを」
「要らねえ」
「だが……っ」
「怪我はおれの失態だ。あんたは関係ねえ」

昨夜ギアを怒鳴ったときのように、ロザヴィンはギアが伸ばした手を弾く。横を通り過ぎていくロザヴィンを、呼び止めることはできなかった。

「ああ、けど……」

去り際に、ロザヴィンが立ち止まってギアを振り向く。

「怒鳴って悪かったな。おれ口悪ぃから」

不機嫌そうにしていても、怒っているわけではないようで、昨夜のことをギアに謝ってから広間を出て行った。

なんて奴だ、と思った。
これでは、昨夜の失態を謝れない。悪いのはギアで、責任もギアにあるというのに。

「風詠」

泣きそうな思いを我慢していると、ふと背後から呼ばれた。

「……楽土（らくど）」

振り向いたそこには、楽土の魔導師と渾名されるアノイが、心配げな顔をしていた。

「ちゃんと休んだのか」
「あ……いや、眠れなくて」
「休め。雷雲が頑張った意味がなくなる」
「わかっている……けど」
「雷雲は口が悪い。わかっているだろう。あれは、おまえの限界がわかって、帰らせたんだ」

ロザヴィンの気遣いを無駄にするなと、アノイに叱られる。

「わたしのほうが歳上なのに……」
「それを言うなら、おまえたちみんな、わたしにとっては歳下だ」
「あなたは長命だから……」
「長く生きていても、わたしは、おまえたちの助けが必要だ」

命の狂った魔導師、とも呼ばれる彼女は、苦笑した。
年齢を気にしていたら、魔導師など勤まらない。魔導師に年齢は関係ない。力の差異も関係ない。魔導師は、魔導師として目覚めた

ときから、そうして生きていくしか道がない。魔導師とは、常に緑に囚われる存在だ。

「なにを考えていた？」

「え？」

「緑の意志に逆らってまで、なにを考えていた？」

「……なに、って」

そんなの、と口ごもったら、アノイが小さく笑った。

「わたしは、レムのことを考えていると、手許が疎かになる。雷雲は、エリクのことを考えていると、不機嫌になる。堅氷は、陛下のことを考えていると、とたんに饒舌になる」

「……それは」

「魔導師には一つだけ、与えられる自由がある」

「自由？」

「家族を愛する自由」

愛するものを得る自由。

それが、魔導師に与えられた一つの自由。

ギアはハッとした。

「わ、わたしはべつに……っ」

「そう照れるな」

恥ずかしいことではないのだ、とアノイは笑う。

「それが、わたしたち魔導師に与えられた、唯一の自由だ」

「で、でも、任務遂行中に……そんな」

なにを考えていたかなんて、アノイには筒抜けなのだろう。
確かに、その通りだ。
ギアは、思い出の人のことを、ふと思い出してしまっていた。なぜあのとき思い出してしまったのかは、わからない。たぶん激しく降っていた雨が、それを思い出させた。

「想いを止めることはできない。そんな無駄なことはやめてしまえ。得た自由を、粗末にするものではない」
「任務遂行中に考えることじゃないっ」
「仕方ないだろう。魔導師とは、そういう生きものだ」
「そんな簡単に……っ」
「なら、想いを消すことができるのか？」

う、とギアは言葉に詰まる。
思い出の人のことを、忘れることができるのかと、そう問われているのと同義だ。

「無駄なことはやめてしまえ、風詠」

思い出さない日などない。
それなら、アノイが言うように、考えることをやめようとするなんてことは、やめてしまったほうがいい。

「いいの……だろうか」
「できないことをやろうとする、その努力は認めよう。魔導師として」

魔導師は、できないことをやろうとはしない。それは自分の限界を知り、力の上限がわかっているからだ。ただ、その努力はする。

アノイはギアのその努力を、認めると言う。
「だが、できないものは、できないだろう？」
忘れようとしたことは一度もない。だから忘れたこともない。思い出の人を、ギアは今も、毎日のように思い出す。
「そう、だね」
考えていてもいい。
想っていてもいいのだ。
そう誰かに言われたことがなかったから、アノイのその言葉には、心からほっとする。
「ところで」
「はい」
「誰だ？」
「はい？」
「風詠の、想う人は」
わたしの知っている人か、と遠慮なく問うてくるアノイに、ギアは真っ赤になる。
「いや、あの……っ」
「風詠はほとんど外に出ているが、生まれは王都だったな？　王城勤めの父君に、よくついてきていた」
「憶えているのかっ」
「わたしは年寄りだが、記憶力は残っている。風詠の小さい頃も憶えているが……そうだな、そういえば小さい頃の風詠は……」

長命で、ギアよりも数倍長く生きているアノイに、隠そうというほうが無理なことだった。

「シィゼイユと、よく遊んでいたな」

見かけていたのだろう。それを、忘れてくれてもいいのに、アノイは憶えていたのだろう。

ギアは真っ赤な顔を、俯いて隠した。

「ん？　ああ……シィゼイユなのか」

「どうして、憶えているんだ……っ」

「わたしにとって、おまえたちは自分の子どもみたいなものだからな」

それぞれの幼い頃を憶えている、とアノイは笑った。

「そうか、シィゼイユか……確かレウィンの村にいると思ったが」

「う……そう、らしい」

「ん？　知らなかったのか？」

「留学すると、聞いて、そのときは知っていたが、帰ってきてからあとのことは……」

思い出の人は、隣国へ留学したあと、一年ほどしてから姿を消した。それから実に五年もの間なんの音沙汰もなく、そしてあるとき突然帰ってきた。

「なら、ちび王子が力を暴走させたときか？」

「うん……そのときまで、どこにいるかも、知らなかった」

「音沙汰もないとは思っていたが、本当に誰にも連絡してなかったのか、シィゼイユは」

「いや、雷雲と師団長には、連絡していたみたいで……」
「ああ、あの辺りは……雷雲は幼馴染で、師団長とは仲がいいからな」

ギアだけ、知らなかった。いや、ギアの想いは一方的なものであるし、想いを口にしたこともないので、思い出の人がギアのことを忘れていてもおかしくはない。そもそも、ギアが想いを寄せるようになったのは、たまたま遊んでもらえる機会が続き、見かけることもたびたびあって、顔を合わせれば挨拶をするという関係があったからだ。特別に親しかったわけではない。

だからギアは。

思い出の人が、あの激しい雨の夜、忽然と姿を消した理由を知らない。あの日、本当に泣いていたのかも、定かではない。幼馴染であるロザヴィンにそれとなく訊いたことはあったが、なにかを察したロザヴィンには適当にはぐらかされた。

あの日、思い出の人は、誰にも理由を告げることなく姿を消した。

そして帰ってきた彼は、あの頃と、なにも変わっていなかった。ふとした瞬間に見せる横顔は、なに一つ、変わっていなかった。

「逢いに行ったらどうだ？」
「えっ？」
「今はレウィンの村にいるんだ。逢えない場所ではない」

それは考えなかったわけではない。彼が帰ってきたとき、それは国を揺るがすかというほどの問題が起きたときで、そのときは余裕もなかったが、落ち着き始めると逢いたいと思う気持ちが膨れ上がった。けれども同時に、逢いに行くことが躊躇われた。

それは中至の祭りのとき。

五年ぶりに式典へ出席した彼は、晩餐の場に、ギアの知らない女性を同伴していた。あとから聞いた話では、その彼女は瞬花の魔導師イチカの恋人で、イチカを驚かせるための演出だったらしい。だが、だとしても、ギアにとって衝撃的なことであったことに変わりはない。彼の笑顔は本物だったのだ。

「わたしが、逢える人では、ないから……」
「想っているだけで充分だと？」
「そもそも身分が違う。あの人は王族で、王弟殿下で、公爵で……わたしはかろうじて子爵家の生まれだけど、翼がない」
「気にすることか？　わたしも、わたしは公爵家の生まれで、レムは子爵家、レムには翼がない」
「わたしは魔導師だ」
「だから？」
「魔導師は……」
「堅氷も、奴は平民の生まれだが、陛下の寵愛を一身に受けている魔導師だ」

気にするところなど、なに一つない。アノイはそう言う。

けれども、とギアは拳を握る。

確かに、身分など気にしていたら、それは魔導師ではない。魔導師とは、緑の法則に従い、緑に囚われる存在だ。身分など魔導師には必要ない。

だから思うのだ。

「あの人には、想う人が……いるから」

彼には想い人がいる。中至の祭りのとき、それを痛感した。この恋は叶わないのだと、自身が恋していたことに驚き、そして同時に失恋したのだ。

「だから想っているだけで、いいと？」

「わたしはもう、あの人以外、誰かを想うことができないと思う。魔導師が得た唯一の自由なら、なおさら」

失恋しても、想い続けることは、それは自由の一つだ。ギアは今までがそうであったように、静かに、彼を想い続ける。

「……苦しい選択をするな、風詠」

「苦しくなんかない。わたしは、あの人を……シゼさまを想うだけで、幸せだ」

彼が、たった一度だけこぼした弱音を、知っている。いつも微笑んでいる彼は、きっと、あれきり弱音をこぼしていないだろう。

だからいいのだと、ギアは微笑んだ。

「わたしはいやだ」

アノイはそう、否定したけれども。

「わたしはレムが欲しいと思った。レムがなにを考えていても、関係ない。レムはわたしのレムだ」

「あなたとわたしは違う」

「……風詠の選択は、苦しくて寂しいから、いやだ」

幸せになって欲しい。そう言うアノイに、ギアは「ありがとう」と微笑んだ。

03 ： それだけは、変わらない。1

ギアは外回りで国中を歩いていることのほうが多く、居室がある魔導師団棟に帰ることが少ない。それはギアの魔導師の力が、攻撃性もなければ防御性に優れているというわけでもなく、柔軟に力を使えることで応用が効くからだった。

その日は、訪れた街の様子を自分の目で確かめながら、役人の話を聞き、住人の話を聞き、街を囲むようにして護っている守護石と呼ばれている呪具の状態を確認したあと、街には泊まることなく次の目的地へと移動した。

魔導師団長からの手紙には、この街から東へ進んだ街、いや村に、様子を見てきてもらいたいものがあると、記されている。

「東……レウィンの村」

行けという場所は、レウィンの村。休暇中の魔導師の様子を、少しでいいから窺ってきて欲しいと、手紙にはある。

「瞬花（しゅんか）のことなら、堅氷（けんぴょう）が出向くべきだと思うのだけど……」

通信ができる手紙に、思ったことを書き記す。あまり待つことなく、ギアが書いた内容が消え、新たに師団長から言葉がくる。

行方を暗ませた、とあった。

「奔放にもほどがあるよ、堅氷……陛下が可哀想だ」

ユシュベル王国女王ユゥリア陛下の夫たる、堅氷の魔導師カヤは、外回りのギアとは違い、奔放に国を歩き回る。ギアのように師団長と連絡し合うならともかく、カヤの場合は誰にも連絡することなく歩き回ることが多いので、行方を暗ませることなどしょっちゅうだった。

「いくら力が強大だからって、もうしばらく陛下のそばにいてもいいだろうに……」

カヤはとかく力が大きい。ギアなど比較にもならない。その大き過ぎる力は、ときに要らぬ争いを引き起こすことから、カヤは一か所に長く留まらない生活に慣れていた。

ギアの思い出の人と、その行動は少し、似ている。

「ん？　レウィンの村……って」

はたと、気がつく。

レウィンの村には、ギアの思い出の人がいる。

「まさか……っ」

ギアは慌てて師団長への手紙に、行きたくないと書いた。しかし、書き方が悪かった。

いいから行けと、これは命令だと、返ってくる。

「師団長……楽土から聞いたな」

数日前の、アノイとの会話を思い出し、はあ、とため息をつく。

魔導師たちみんなが自分の子どもだと言いのけたアノイは、おそ

らく老年の師団長のことも子どものように思っているだろう。だが、師団長とて老年だ。ふとした会話に、ギアのことを話題に上げた可能性が高い。

「外見があれだと、得することが多いんじゃないか……？」

アノイは長命で、百年を軽く生きている。だがその外見は、ギアとそう変わらない。年寄りだと思っていても、たまにその外見で騙される。なんでもない言葉でも、こぼしてしまったら、お茶のちょっとした話題にされるので注意が必要だ。

思い出の人のことは、きっと、師団長との茶菓子にされた。

「黙ってくれていてもいいのに……」

どうしてこう、魔導師という生きものは、同胞にやたらと甘く、かまいたがるのだろう。

ギアはたびたび深くため息をつくと、行きたくないわけではないが行くことが躊躇われるレウィンの村に、足を向けた。

「向かい風か……少し時間がかかるかな」

操る風のせいにして、辿り着く時間を引き延ばすくらい、いいだろう。どうぜ夕方に着くことに変わりはない。詠唱して風を呼び、身体を宙に舞い上がらせると、速度もそこそこにゆっくりと空を飛んだ。

「……強雨の被害は少ない、か」

師団長からの命令でレウィンの村に行くとしても、魔導師としての性は、常に働く。眼下の山道や、植物、動物、緑の状態を、具に

観察しながら飛ぶのはいつものことだ。

「うん、緑が綺麗だ」

レウィンの村があるほうは、わりと災害が少ない。綺麗な緑がたくさんあって、目が癒される。頬にあたる風も心地よく、太陽の陽射しも柔らかい。

思い出の人は、とてもいい村を、見つけたのかもしれない。

しばらく気分よく飛び、レウィンの村が見え始めたときだった。

「……あれは」

ふと眼下に、黒い外套が見えた。魔導師の外套だ。

「瞬花、か？」

休暇中の魔導師が、ひとり、畑の畔道を歩いている。高度を下げて着地に備えると、その魔導師、瞬花の魔導師と渾名されるイチカがギアに気づいた。

琥珀色の髪、中央に渦を巻く黄緑色の特徴的な双眸、それは堅氷の魔導師カヤの弟子、瞬花の魔導師イチカ。

「風詠さま？」

「久しぶり。わたしがわかるか」

「そのお名前だけですが。お久しぶりでございます、風詠さま」

真面目で丁寧なイチカは、律義にも深々と頭を下げてくる。風詠さま、というくすぐったいような呼び方にも、ギアは肩を竦めた。

「休暇中なのに、魔導師の官服を着ているのか？」
「こちらのほうが落ち着くのです」
「魔導師だな」
「まだまだ、半人前ですけれどね」

イチカはギアよりも六つ歳下の魔導師だ。ギアも、イチカくらいの歳にはもう魔導師になっていたので、特別イチカは若いというわけではない。ただイチカの場合、カヤの弟子ということもあって、その成長はふつうよりも早かったと思う。

「調子はどう？」
「先日の雨には冷や冷やさせられましたが、守護石を新しくしていたので、大きな被害はありませんでした。畑もこのとおり、元気ですよ」
「そうじゃなくて、きみのほう」
「僕……ですか？」

瞬花の魔導師イチカといえば、この国の王子アリヤの侍従であり、アリヤの魔導師としての力を自分の力に変換して使うこともできるという特異体質にある。後者に関してはここ最近になって発覚したことだ。

「だいぶ負担があるんじゃないか？」
「……ご存知なのですね」
「あの騒ぎは堅氷の命も危険だった。知らないでいるには、少し難しい」

数か月前、王子アリヤは魔導師の力を暴走させている。その事件でイチカの特異体質が明るみに出た。あのときのことは、ギアも記憶に新しい。なにせ思い出の人が帰ってきたきっかけでもあるのだ。

「僕は相変わらず、ですよ」

ふっと視線を遠くにやったイチカは、緩くなびく風に伸びた髪を遊ばせる。

「アリヤ殿下の力を使えるといっても、その力は大きくて、僕には扱えそうにありません。器で在り続けることが、僕に課せられたものでしょう」

「随分な特異体質に恵まれてしまったな」

「そうですね。ですが、そのおかげで、僕はこうして生きています」

ふふ、と笑んだイチカは、畑の向こうに見える人影に微笑んでいて、手を振られると自分も手を振り返していた。

「あれは……？」

「僕がお世話になっているアサリさんです」

「ああ……彼女が」

イチカが手を振っていたのは、あの中至の祭りの晩餐で、ギアの思い出の人が同伴させていた女性だった。本来は、イチカの恋人である。晩餐のときは、イチカを驚かせるために同伴させていただけらしいが、ギアの胸中は少し複雑だ。

「シゼさまは彼女が好きだったんだろうな……」

あの笑顔は、そうだったように思う。

「はい？」

「あ、いや、なんでもない」

イチカに聞かせていいものではない、とギアは慌てて首を左右に振る。ギアの呟きは聞こえていなかったようで、イチカはきょとんとしたあと、道を進みましょうと促してきた。

「もう陽が落ちます。レウィンの村に泊まっていかれるのでしょう？　案内しますよ」

イチカの様子を見に立ち寄っただけだから、と言うには少し憚れたが、それ以外に用事もない。ギアは「いいや」とイチカの案内を断った。

「瞬花の姿が見えたから、久しぶりだなと思って寄っただけだ。もう行くよ」

「お急ぎでしたか」

「特に命令はされてないから、適当にふらついて王都に帰る」

「それなら、ゆっくりされてもいいでしょう。アサリさんが働く食堂は、とても美味しいと評判の料理屋です。せっかくですからご馳走させてください」

「だが……」

「僕、今日はアサリさんがこれから仕事なので、家を追い出されてしまったのです。アサリさんのところで夕食を摂らないと、帰ってもなにもないので」

寂しいからつき合ってくれませんか、とイチカは丁寧にも誘ってくる。確かにこれからギアも夕食をどこかで調達しなければならないし、それくらいならいいかもしれない。

「奢ってくれるのか？」

「ええ、喜んで」

「悪いね」

本当はレウィンの村に長く留まりたくはないけれども、これから王都に戻って夕食、と考えると億劫だ。

さっと食べて、さっと帰ればいいかと、道案内するイチカの後ろに続いた。

０３　：　それだけは、変わらない。１（後書き）

＊ご存知の方も多いかと思いますが、
堅氷の魔導師カヤの物語は【夢を見てもいいですか。】と【笑ってもいいですか】と【そばにいてもいいですか。】です。
瞬花の魔導師イチカの物語は【あなたと生きたいと思うのです。】です。
楽土の魔導師アノイの物語は【雪解けの空に羽ばたいた。】です。
雷雲の魔導師ロザヴィンの物語は【晴れた空が嫌いでした。】です。
登場人物に混乱されましたら、そちらの物語を読んでいただけたらわかるかと思います。

このたびも読んでくださりありがとうございます。

０４　：　それだけは、変わらない。２

アサリ、という名のイチカの恋人は、イチカと肩を並べる長身の女性で、溌剌とした人だった。イチカと顔を合わせると、嬉しそうに笑う姿がとても印象に残る。
誰かに似ている、と思った。

「風詠さま？　どうかされました？」

食後のお茶までご馳走になりながら、ギアはハッとわれに帰る。
イチカに案内され、ご馳走になった料理屋、というより大衆食堂は、ギアの口にも合う美味しい料理ばかりで、今いただいているお茶も申し分ない。

「すまない、考えごとをしていた」
「考えごと、ですか」
「その……彼女が、誰かに似ている気がして」

あと少しで名前も思い出せそうなのに、なかなか思い出せない。
それはもやもやと、胸中をざわつかせる。

「性格が、どうやらシィゼイユさまのお知り合いに似ているようですが」
「え……シゼさま？」
「はい。以前シィゼイユさまが、そのようなことをおっしゃってお

られました」

ここで思い出の人の名が出たことには驚いたが、それを聞いてふと、唐突に思い出した。

「ああ、慈光の魔導師さまだ……」
「慈光……エルティさま、でしたか」
「ああ。知って……いるわけないか」
「はい、お名前だけ。確か雷雲さまのお母上さまだったかと。僕が師に拾われるずっと以前にお亡くなりになっているので、それくらいしか知らないのですが」

ああそうだ。随分と懐かしい記憶だ。

「わたしもそれほど憶えているわけではないけれど……うん、彼女によく似ているような気がしたんだ。もっとも、慈光さまはもっと口が悪かったけれどね。雷雲みたいに」
「二世代で魔導師というのは、珍しいことだと聞きました」
「そう……かな。兄弟姉妹ではたまにあるけれど。魔導師の力は、親から子へと継がれるとは、限らないからね」
「師の力はアリヤ殿下に受け継がれていますが」
「堅氷は別だ。あの人の力は大きい」
「例外、ですか」

なんにでも例外はある。それは懐かしい記憶の人と、ロザヴィンもそうだ。それに、イチカだって、その特異体質は例外になる。

「きみも例外的だけれどね」
「僕ですか？」
「力を変換できるなんて、誰にでもできることじゃない」

「僕は……その体質でもありますが、ほとんどの部分は呪いに補われています。基本的な力が弱いので」
「呪い？」
「師から呪いを受けています。この目に」

イチカの双眸は、渦を巻いている。特徴的なものだと思っていたが、どうやらそれは呪いの影響によるものだったらしい。

「やっぱり堅氷の力は計り知れないな……」
「そうですね」

苦笑したイチカは、お茶のおかわりを頼むと、運んできてくれた恋人に優しげな目を向ける。

「ええと、ギアさん、でしたよね。いかがですか？」
「いただこうかな」

記憶に懐かしい人に似ているイチカの恋人は、しかしその人と違って口調は丁寧だ。あの人は誰に対しても口が悪くて、師団長によく叱られていたものだ。

くす、と微笑んだときだった。

「魔導師がふたりも珍しいとか思ったら、イチカくんと、ギアじゃないの」

その声に、ギアは硬直する。
忘れもしないその声、絶対に忘れられない声、それはギアの思い出の人。

「……シゼさま」
「やあ、ギア。イチカくんと食事？　珍しい組み合わせだなぁ」
笑顔で現われたのは、村に随分と馴染んだ様子の、思い出の人。
その素性が王弟殿下であると、知れたらどうなるだろう。
「アサリちゃん、わたしにもお茶をくれるかな。あと店主に、持ち帰りできるものを頼んでくれない？　麺麭はあるから、煮もの系で」
「汁ものは要らないの？」
「まだあるなら欲しいけど。ただ容器は持ってきてないよ？」
「うちで用意するわ。待っていて」
「お願いします」

イチカの恋人に、それが目的だったのだろうことを頼むと、断りもなく思い出の人、王弟殿下でもあるシィゼイユ・ホーン・ユシュベルは、ギアとイチカの席に腰を下ろした。

「こんばんは、シィゼイユさま」
「こんばんは、イチカくん。なに、今日はラッカさんとアンリさんに家を追い出されたの？」
「アサリさんが深夜までの勤務なので」
「ああ、それじゃあ仕方ないね。それから……ギア」

久しぶりに呼ばれて、呆然としてしまっていたギアはハッと息を呑む。

「お久しぶり、です……」
「久しぶり？　この前逢ったばかりだろう」
「え？」
「祭りのとき、ギア、いたでしょ。忙しそうだったから声はかけな

かったけど」

ギアがいたことに気づいていたとは驚きだった。ギアとしては、一方的に見かけていたつもりだったのだ。

「ここにイチカくんといるってことは、外回りの途中？　レウィンの村に泊まってくの？」

「か、帰るところです。夕食は、瞬花に誘われたので……」

「今から帰るの？　近くの街に移動するならともかく……え、帰るの？　今から？」

「はい。いくつかもう回ったので、報告しなければなりませんし」

帰る、と言ったら、シィゼイユに剣呑そうな顔をされた。それが不思議で首を傾げたら、だめだよ、と言われた。

「なにが、だめ、と？」

「もう陽が落ちたんだよ？　ひとりで今から王都って、危ないだろう」

「は……いえ、わたしは魔導師ですし、特に危険は」

「あるよ。ギアは女の子だよ？　女の子が今からひとりで王都って、そんな危険なことしちゃだめだよ」

「あの、わたしは魔導師なので……」

「そういうの関係ないよ。それに、ギアは翼もないでしょ。今日は泊まっていきなさい」

危ないからね、と言うシィゼイユには妙に気迫があって、なんとなく逆らえない。

「イチカくんも、こういうときは泊まるんだよって、言わなくちゃだめだよ。ギアは女の子なんだから」

「はい、申し訳ありません」

女の子、と呼ばれていい歳ではないのだが、シィゼイユの気迫はイチカも黙らせた。

「ということだから、ギアは今日泊まること。宿屋はあるけど、イチカくんやわたしがいることだし、路銀を使うなんて勿体ないから……アサリちゃんが遅番なら帰りは深夜か……うん、わたしのところにおいで」

「……、はっ？」

なに、と瞠目して驚いている間に、シィゼイユは勝手に決めていた。

「え、シゼさま？」

「ああそれ、ギアにそう呼ばれるの、すっごい久しぶり」

「あ……申し訳ありません、ホーン公爵」

「シゼでいいよ。公爵なんて、ただの肩書きだからね」

「ですが」

「あ、アサリちゃんが戻ってきた。よし、じゃあ、お酒でも飲もうか」

「え？」

「アサリちゃん、果実酒お願いしていいかな」

断ろうとしたギアだったが、シィゼイユは話を聞こうとせず、けっきょく飲む予定にもなかった酒が、卓に三つ並ぶことになった。

05 ： それだけは、変わらない。3

どうして、こんなことに。
なぜ、こんな状況に。
なにがどうなって、こうなったのだ。
そんな、混乱の常套句である言葉をぐるぐると頭に巡らせながら、ギアは内心冷や汗を流しながらシィゼイユの目の前で朝食を摂っている。美味しそうな麺麭の香りは、しかし目が覚めた一瞬にしか感じられず、口に運んでいる今はもう味などわからない。
わたしはどうして、ここにいるのだろう。
昨夜はそう、イチカに夕食をご馳走になった。イチカの恋人アサリが働く大衆食堂は、これが意外にも絶品でギアの胃の腑を満足させた。
そのあとだ。
ギアの思い出の人、おそらくは初恋の、そして今もなおとても大切に想い、心の奥底に秘めている人が、食後の席に現われた。王都に帰るギアを心配し、宿泊地を提供し、酒を勧められたのはもう昨夜のことになる。つまりそれは、ギアが提供された宿泊地に泊まり、眠る前には酒を飲んだということだ。

「……ギア」
「は……はい」
「二日酔い？」
「失礼ながら、そのようです」

記憶がないのであればよかったのだが、残念ながら鮮明である。むしろ弱いという自覚がある酒を飲んだのにも関わらず、緊張のあまり酔いが回らず、眠気もこず、二日酔いというより寝不足であるといったほうが、今のギアには正しい状態だ。

「それなら食が進まないのも仕方ないけれど……ちょっと待ってね、今薬を持ってくるから」

「え、あ、いえだいじょうぶです」

「いいから。わたしは薬師だよ？　こんなときこその薬師でしょう」

ギアを心配してくれたシィゼイユは、朝食の席を立つと隣室に姿を消す。すぐに戻ってきた彼の手には、小さな薬壜があった。無色透明のその薬は、ギアが飲んでいたお茶に数滴、垂らされる。

「胃の腑を調整してくれる便利な薬だよ。味も匂いもないから、こうして飲みものに混ぜて使うんだ。だいじょうぶ、大量に入れない限り毒にはならないから」

毒ではないから、とは、つまり毒にもなるということだ。それには少し恐怖を覚えるが、たとえばシィゼイユに殺されるための毒なら、ギアは喜んで口にする。

「申し訳ありません……」

謝りつつ、ギアはお茶を口に含む。シィゼイユが好んで飲むラハルの茶は、すっきりしていて渋みがほとんどない。これを蜂蜜で少し甘くしたものを、シィゼイユは常飲している。

昔と変わらないな、とふと思った。今も昔も、変わらないことがあるなんて、なんだか少し嬉しい。

「酒に弱かったんだね、ギア」
「ええ、まあ……」
「あんまり飲まないの？」
「自分から進んで飲むことは、まずありません。得意ではありませんから」
「美味しいのに勿体ないなぁ」
「そういうシゼさまは？」
「わたしはひとりで月見酒。この村での娯楽って、それくらいだからね。まあ十分だけど」

ひとりで飲む酒もまあまあ美味しいよ、と微笑みながら、シィゼイユは朝食の皿を綺麗にしていく。ギアも少しは食べなさい、と言われて、齧ってしまった麺麭だけは食べきった。

「イチカくん並みに小食だな……いつもはもうちょっと食べる？」
「これに生野菜を少し……」
「偏食」
「すみません……」
「朝はしっかり食べないと、頭が働かないよ。そうでなくても魔導師は忙しいんだから、体調は万全にしておかないとだめだろう」
「……ごもっともです」
「まあ、弱いのに酒を飲ませたわたしが悪いか。仕方ない。わたしのほうから師団長に連絡するから、もう一泊してくといいよ」
「は……はいっ？」

説教を甘んじて聞いていたが、聞いてはいけない言葉を聞いてギアは慌てる。

「だいじょうぶ。師団長とは連絡手段があるんだ。あと……そうだなあ、ついでだからイチカくんみたいに休暇申請したらどう？　外

回りって、休む暇もないでしょう」
「いえ、すぐに王都へ帰ります。報告書の提出もありますし、次は北方へ行く予定なので、支度に時間が」
「はいはい、仕事ばかの魔導師さん、たまには身体を休ませましょうね」
「シゼさまっ」
「聞かないよー」

なにをばかな真似を、と思ったが、本当にシィゼイユはギアの断りを聞かなかった。終えた朝食の片づけを始めたシィゼイユは、ギアが後ろでこれからの予定を述べているのに、相槌もしなければ頷きもしない。

「あ、そろそろ往診の時間だ。ギア、手伝って」
「え？」

口をきいてくれたかと思ったら、片づけを済ませてすぐ移動を開始したシィゼイユは、隣室にギアを呼ぶ。

「こっちこっち。その棚から赤と透明の薬壜を二つずつ、すぐ下の棚から紙袋を一つ、取ってくれる？」
「あ、は、はいっ」
「それをこの鞄に入れて。あと机にある薬壜も全部、持って行くから鞄に」

隣室は薬師であるシィゼイユの調合室のようで、慣れない匂いが鼻を突く。その中で、あれこれ指示されて薬や道具を鞄に詰めた。気づけばもう外に出ている。ギアは荷物持ちと化していた。

「し、シゼさま」

「足許に気をつけて。ロザに少しずつ土地を作ってもらって、人が住めるくらいにはしたけど、ロザは調整術が上手くないからね」
「……雷雲？」

シィゼイユが居をかまえる家は、周りに住居がない。少し歩いた先に小屋はあるが、そこは農耕のために作られた物置小屋で、人が住めるような建物ではない。しばらく歩いてやっと民家が見える、そんなところにシィゼイユの居がある。昨夜は夜道で、今よりももっと緊張していたので周りを見ている暇などなかったが、シィゼイユに説明されてやっと足許に目がいった。

「ロザの力は攻撃性が強いだろう？　こういうところなら、ロザのそんな力で調整を試みても危険は少ないし、だからちょっと訓練をね」
「訓練、ですか」

なだらかとは言い難い足許は、あちこちに凸凹がある。誰かの手が入ったのだとしたら、それはとても不格好で、いい仕事をしたとは言い難い。自然にできた道に見えなくはないが、それにしては見晴らしがよく、しっかりと歩いていれば躓くこともない。

「楽土の魔導師……アノイなら、もっと上手く土地を均すことができるんだろうけど、そんなふうにロザは細やかに力を使わないからね。やればできるくせに、面倒臭がりだから」
「まあ……相性も、ありますし」
「相性？」
「雷雲は天の力に属性があるのだと思います。雷を操れますし。そうすると、地の力に属性がある楽土のように、地に属するものを操ることは、あまりできないでしょう」
「え、そういう法則ってあるの？」

「はっきりとした法則ではありません。歴代の魔導師を調べると、属性のようなものがある、という曖昧な調査結果がでるだけです」
「へぇ……知らなかったな」
だいぶ歳をとって、いろいろなものを知ったつもりでいたのに、とシィゼイユは苦笑する。
「シゼさまの知識は、充分であると、思いますが」
「そうでもないよ？　留学したときなんかは、まあ知識は別として、生活の違いにけっこう戸惑ったしね。なかなか慣れなくて、苦労したよ」
留学、とシィゼイユの口から出て、少しだけどきっとした。ギアはシィゼイユが留学したあとのそれからを、つい最近まで、知る機会がなかった。留学から帰ってきて、どこでなにをしていたのか、まったく知らない。そもそも留学の期間は長かったはずであるのに、たった一年で帰ってきたと聞いたときも、いったい彼になにがあったのか、さっぱり見当がつかなかった。
「あ……あの、シゼさま」
「うん？」
「留学のとき……」
なにがあったのですか。
そう、訊けたらいいのに。
どうしてだろう、訊くことができない。訊いてもいいのか、わからない。シィゼイユは、誰にもなにも告げず、姿を消している。その理由を、幼馴染のロザヴィンは知っている様子だが、それに関して誰にも口を開かない。
だから誰も知らない。

シィゼイユが、突然、留学を決めたこと。長期留学を、短期間で終わらせて帰ってきたこと。帰ってきたのにも関わらず、つい最近まで王城はおろか王都にも姿を現わさず、連絡を絶ち、王都から離れた村にいたこと。そしてまた、姉であり女王の危機には城に帰ってきたものの、居を村にしたままにしていること。

どうしてシィゼイユは、王弟であり公爵である地位を捨てて、隠れ住むように村にいるのだろう。

「ギア」

「はっ……はい！」

「見えてきた。あれが今日最初の往診する家だよ。急ごうか」

訊けなかった。どうして、と一言、口にするだけだ。なにがあったのかと、さり気なく訊けばいいものだ。

それでも、訊けなかった。

あの弱音を、ギアただひとりが、聞いてしまったからだろうか。

『すごく、寂しくなる……心にぽっかり穴が開いて、どうしようもなく締めつけられて、それで、苦しくなる。温かいものを見ていると、感じていると、どうしても……寂しくて悲しくなるんだ』

弱くて強い、シィゼイユがこぼした弱音。

笑みの裏に隠れた、なにも見ていないひどく冷めた横顔。

それらを知っているから、見てしまったから、なにかを知るのが怖いと思ってしまったのかもしれない。

今もそれだけは、変わらない横顔だったから。

変わらないことは嬉しく思うのに、その横顔が変わらないのは、嬉しくないと思った。

06 ： それだけは、確かなこと。

シィゼイユが薬師として見せるその姿に、意外性を感じつつ納得ができた。
この人は悲しいことを、寂しいことを、考えないようにしている。
それは故意にしていることだ。
だからシィゼイユは微笑む。常に、誰に対しても、どこででも。
だから誰も知らないのかもしれない。
ふとした瞬間に見せる、陰った横顔を。
いったいなにが、シィゼイユにそうさせているのだろう。

「……シゼさま」

ギアにはわからない。ギアが憶えている思い出の中に、シィゼイユのそれを知る手掛かりはまるでない。
わからなくて、悲しくなった。

「？　なにその顔」
「え？」
「途方に暮れたような顔しちゃって……そんなに仕事したい？　魔導師って、どうしてそんなに緑が好きかな」

ギアの表情は、どうやらシィゼイユには「王城に戻って次の仕事へ行きたいと思っている」と捉えられたらしい。確かに仕事は気になるが、それと同じくらい、シィゼイユのことが気になって仕方な

い。いくら魔導師に唯一許されたものだとしても、考え過ぎだと思うくらいに。

「どうしたらいいのか、わからなくて……」
「なにがわからないの？」
「その……どう言えばいいのか」
「うん？　言葉にできないってこと？」

確かに、言葉にできない。言葉にし難い。どうして悲しい顔をしているのか、とシィゼイユに問うても、今この瞬間も微笑んでいるシィゼイユに、その言葉がどんなふうに伝わるのかわからない。そもそも、訊いてもいいものなのかさえ、ギアにはわからない。

「……ねえ、ギア」
「はい」

立ち止まって振り返ったシィゼイユが、じっと、ギアを見つめてくる。うっかり見惚れてしまったのは、シィゼイユのその姿が、とても好きだと思ったから。
ああ、わたしはこのお人に恋をしている。
改めて、そう自覚する。
どこから溢れてくるのかわからないいとしいと想う心に、胸が締めつけられる。

「仕事のことを考えているわけではなさそうだね」
「あ……え、と」
「そうか……うん、そうだね」
「？　シゼさま？」
「もうそろそろ、いいよね」

なんのことか、ギアにそれを話すことなく自己完結させたシィゼイユは、にこっとギアに微笑みかける。

「行こうか」
「？　はい」

促されて、一歩を踏み出すと、シィゼイユの手がギアの手を取った。

「！　し、シゼさま」

吃驚しても、シィゼイユの手が離れていくことはない。むしろ引っ張られて歩くことになった。

「シゼさま、どこに……もう帰るのですか？」

ずんずんと歩くシィゼイユは、ギアを引っ張りながら今来た道を戻っている。今日の往診は少ないと聞いているが、それでもまだ四件ほどしか回っていなくて、いいのだろうかと少し不安になる。シィゼイユの薬を待っている人たちが心配だ。

「シゼさま、あの、往診がまだ、残って……っ」
「往診が不定期だというのは承知してもらっているから、だいじょうぶ」
「で、ですが」
「必要なところにはもう行ったからね、心配はない」

だいじょうぶだよ、と繰り返したシィゼイユは、真っ直ぐ家に向かう。
ギアが戸惑っているうちに、家には辿り着いてしまった。

「さて行こう！」
「えっ？」

ここからさらにどこへ行こうというのか。
荷物を家に置いたシィゼイユは、その背にばさりと、真っ白な翼を出した。久しぶりに見る、シィゼイユの一対の翼だ。思わず見惚れてしまう。ここまで真っ白な翼は、血が濃いとされる王族の翼種族でもそういない。

「わたしは夜目が利かないから、明るいうちに行かないとね」
「あ……え？」

うっとりと見とれていたら、不意にシィゼイユの腕が腰に回り、引き寄せられた。

「し、シゼさま？」
「さあ掴まって。風の力で補助してくれると助かるかな。早く移動できるからね」

力を貸してくれ、と言ったシィゼイユは、そのままギアを抱え、翼を動かした。
ふわりと、身体が浮く。
慌てて詠唱し、風をシィゼイユの翼に集めた。

「あの、わたし、自分で」
「いいから掴まっておいで」
「でで、ですがっ」

いったいなにが起こっているのかと、そう理解する前に、シィゼ

イユは翼を羽ばたかせ、空へと舞い上がる。ある程度の高さまで登ると、徐々に速度をつけて飛行し始めた。

「シゼさま！」

「ちゃんと掴まって、ギア。落としちゃうよ」

いっそ落とされたい。こんなに近いシィゼイユの体温に、感じ入っていられるほどギアの心臓は強くないのだ。

「おろ、下ろして、くださ……っ」

「この高さから落ちたらさすがのギアも大変だと思うよ？」

「わっ、わたしは、風詠の魔導師ですっ」

「古来の風読み一族チェリング、その知識を疑うわけではないけれど、飛行に関してはたぶんわたしら翼種族のほうが長けているよ？」

それはそうだが、身体と身体の距離が、近過ぎるのだ。ばくばくと高鳴っている鼓動が、いつシィゼイユに知れるともわからない。掴まってと言われても、そんなこと、ギアにできるわけもなかった。

いっそ落とされるか、気絶してしまいたい。

「うー……っ」

「なに緊張してるかなあ？　昔はよく一緒に飛んだじゃない」

幼い頃は、子どもだったから素直だったのだ。シィゼイユといられるだけで幸せなのは今も同じだが、昔のように「嬉しい」と「幸せ」だと、明け透けにはいられない。それくらい、おとなに成長してしまった。

「まあ、いいか。わたしがしっかりと捕まえておけばいいからね。少し速度を上げるから、目を閉じておいで。乾いちゃうよ」

ギアの気持ちなどばっさり無視してくれたシィゼイユは、ギアの頭を胸に押しつけて、これまたギアを硬直させる。頭上で苦笑する声を聞いたが、ギアにはそれどころではなかった。

そうして飛び続けること数時間、ひたすらギアはシィゼイユに心内を知られないよう必死に隠し、一方でシィゼイユの穏やかな鼓動に耳を傾けていたわけだが、やはり足が地につくとほっとする。すぐにシィゼイユから離れた。

しかし。

「まだだよ、ギア」

「へ……？」

シィゼイユがギアと共に降り立ったのは、王城の中央、つまり女王たるユゥリアを中枢にした者たちが働く場所だ。皆が執務中なのであまり人気を感じないが、それでもいくつかの視線はある。そんなところにシィゼイユと降り立ち、あまつさえ、手は握られたまま。ギアには赤面ものだ。

「うーん、と……姉上はあっちかな」

「姉……え、陛下？」

「先に報告しないと、次々持ち込まれそうだからね」

「ほ、報告？　持ち込まれ？」

なんのことか、さっぱりである。

早口に述べたシィゼイユは、辺りをきょろきょろしながら宮に入り、廊下を歩いて行く。ちなみに手は、ずっと繋ぎっぱなしだ。

ああどうしよう、なにが起きているのだろう。ギアの頭は混乱に

陥り、破裂寸前だ。
「あーねうえーぇ」
「ん？　あら、シゼ？」
「お久しぶり、姉上」
ああどうして、こんなことに。そう思ったところで、もはや手遅れだ。シィゼイユは今代王陛下、ユゥリアをあっさり執務室で捕まえた。
「中至の祭り以来ね、シゼ。こんなに早く来てくれるなんて……あら？」
女王陛下が、シィゼイユに引っ張られて連れてこられたギアを見つけ、美しい蒼の双眸を真ん丸にする。
「随分と懐かしい組み合わせ……いったいどうしたの？」
「あれ？　姉上、ギアを知ってるんですか」
「あなたたち、昔は一緒に遊んでいたじゃない」
「一時のことですけど？」
「あなたが誰かと遊ぶなんて珍しかったから、よく憶えているのよ」
「あー……わたしはひとり遊び専門ですからね」
「友だちなんて、ロザヴィンくらいしかいなかったでしょ」
「ロザは弟みたいなものですよ。今はああですけど、昔はすっごく可愛かったですからね。女の子みたいで」
「それ、本人に言ったら怒るわよ。シャンテもね」
「シャンテは弟大好きですからねえ。じゃ、なくて」
「なぁに？」
姉弟らしい会話をしていたシィゼイユだったが、唐突にギアを、

ユゥリアの前に引っ張り出した。え、とギアは驚き、その事態に硬直する。

「風詠の魔導師ギア・チェリング。わたしがもらいますよ？」

その宣言は、ギアを思い切り、驚かせた。それは息が止まるほどの、驚愕だった。

「あら、あら……なに、あなた、いたの？」

「いましたよ。言うと面倒なことが起こりそうだったから、黙っていただけです」

「わたくしには教えてくれてもよかったでしょう」

「もう一度言います。言うと面倒なことが起こりそうだったから、黙っていただけです」

「それでも、よ」

「面倒ごとは嫌いです」

「横着ね」

「あなたという姉を持つ弟ですからね」

そういうことですから、と言ったシィゼイユは、固まるギアの頬をそっと撫で、現実に引き戻す。

「……シゼさま？」

「うん。今の、聞こえたよね？」

「は……はい」

「きみ、今日か明日あたりから、ギア・チェリング・ホーンだから」

「は……？」

「わたしはシィゼイユ・ホーン。漸くユシュベルの名から解放されるわけだ」

なにを言われているのか、理解には、まだ追いつかない。

「……、え？」

確認するように瞬きをして首を傾げれば、見惚れるほど美しく、シィゼイユは微笑んだ。それは悲しそうな横顔からは想像できないほど、艶やかで偽りないものだった。

「よろしくね、奥さん」

呆然と、ギアはシィゼイユを見つめる。

なぜこんなことになっているのか、ギアは未だ理解できていないが、シィゼイユが突拍子もないことを言った、それだけは確かなことだった。

07 ： 充分だなんてもう言えない。

徐々に頭が理解に追いつき、ギアは青褪める。
鼻歌でも歌いだしそうなシィゼイユに手を引かれていたが、廊下の真ん中で、その歩みを止めさせた。

「なぜ……なぜ、あんなことを……」
「うん？　どうかした？」
「なぜ陛下に、あのようなことを……っ」

好きでもなんでもないくせに、なにを間違えて、ギアを妻に迎え入れるなどという話を女王陛下にしたのだと、ギアは切羽詰まりながら訴えた。

「わたしは、魔導師で、シゼさまとは、立場が違います。生まれも、なにもかも、違うのに、なぜあのような……っ」

嬉しいと、素直に思えたらよかった。幸せの中に、浸れたらよかった。

けれども、ギアにはそれができない。

ギアは欲していない。

想うだけで、想えることだけで、充分だ。

「……ギアはわたしが好きだろう」

ぎくりと、ギアは肩を震わせた。それはシィゼイユに、ギアの心を見せたも同然だ。頬に熱が集中し、顔を上げていられなくなる。

「その気持ちがあればいい。数度しか逢わずにそのまま婚姻なんて、あまりにもばかばかしいしね。そういう話を持ってくる貴族も、どうかと思うし」

「え……？」

「わたしは国政には関わらないと、そう決めている。なのに、そういうのを含ませた縁談を持ち込んでくる世話好きがたくさんいてね。それが最近ではレウィンの村にまでわざわざ足を運んでくれるから、本当に困ったものだよ」

つまりは、とギアは高速で頭を回転させる。

シィゼイユは、持ち込まれ続ける見ず知らずの娘との縁談を断るためだけに、自分を少なからず好いているギアに婚姻を持ちかけたということだ。それはシィゼイユが、ギアを好きでもないのに相手に選んだと、真にそういうことである。

「縁談を、断る、ため……だけ？」

ああやっぱり、そうか。

シィゼイユは、ギアを好きなわけではない。ギアがシィゼイユを慕っていると、それは都合がいいことだったから、ギアを妻にと選んだ、それだけのことだ。

「そ……です、か」

少しでも期待した自分がばかだった。

いや、期待なんて、するほうがおかしかった。
それなのにギアは、シィゼイユが自分を好いてくれているかもしれないと、そう期待してしまった。
ギアは、期待してしまっていたのだ。
この想いに、シィゼイユが、応えてくれたのだと。
一度も想いを伝えていないのに、なんて自分勝手な解釈をしたのだろう。あまつさえ、想っていられたらそれでいいと思っていたくせに、充分だと思っていたくせに、こうして真実を知ったとたんに悲しみが込み上げてくるなんて、なんて勝手なことだろう。

はは、と空笑いが出た。

わたしはばかだ。
想われている、なんて、思ってしまった。少しでも、そう期待してしまった。

なんて、愚かだろう。
そんなこと、あり得ないのに。

「……、ギア？」
「すみません、少し、頭を整理したいので」

シィゼイユに引かれていた手を振り解くと、ギアは踵を返した。

「ギアっ？」

突然のことにシィゼイユは驚いてギアを呼んだが、ギアは振り返ることなく廊下を走った。
自分の勘違いに恥ずかしくて、けれども現実には悲しくて、頭がもうぐちゃぐちゃだった。

闇雲に走って、その視界が涙で滲んでくると、泣いている自分がばかみたいで笑えてくる。

「あり、えない…っ…そんなの、わかってたくせに」

この恋は実らない。
この想いは満たされない。
それを覚悟していたくせに、現実にそれを目の当たりにすると、こんなにも空しくて悲しい。
わたしは本当に、シィゼイユが好きだ。
想うだけで、想えるだけで、充分だなんてもう言えない。

応えて欲しい、受け入れて欲しい。
好きだと、愛していると、言われたい。
優しく温かい腕に、抱きしめられたい。

貪欲にも、それを求めてしまう自分が確かにいた。

「わかってた…っ…わかってたのに」

夢を見てしまった。シィゼイユに、見惚れるほど美しい笑みで「奥さん」などと呼ばれてしまったから、一瞬でもギアは夢を見た。
その将来を、想像してしまった。
シィゼイユに愛される自分。
求めに、応えてくれるシィゼイユ。
求められて、応える自分。
さまざまな夢を、一瞬で見てしまった。
だからもう、溢れた想いを留めておくことなど、できやしない。
溢れた想いは、溢れ続ける。次から次へと、ギアを襲う。

止められない。
捨てられない。
忘れられない。
現実を目の当たりにした今でさえ、想いを消すことができない。
こんな想いが自分に潜んでいたなんで驚きだ。
こんな激情を、ギアも、持っていたらしい。

「ギアさま！」

そんな、泣きながら走っていたギアを、腕を掴んで止めた者がいた。

ハッとして振り返ると、どこかで見たような顔の文官が、軽く息を切らせながらギアの腕を掴んでいる。

「アノイさま、捕まえましたよ！」

その文官は、ギアを捕まえるとすぐ、後方を振り返って小さな影を呼ぶ。随分と後ろのほうから、アノイが走ってきていた。いや、走るというより、急いではいるが歩いていた。

「すみません、ギアさま。アノイさまは走られると転ばれるので、僭越ながらわたしが走り、お呼び止めした次第にございます」

文官が、息を整えながら状況を教えてくれる。

「……あなたは」

「申し遅れました、わたしはレムニスと申します。この場では、アノイの夫、と認識していただけますでしょうか」

文官は、アノイの夫たる宰相補佐、レムニスだった。

「風詠！　足、速い……っ」

「……楽土」

「レム、離すな。わたしは、もう、走れない。疲れた」

アノイの声が漸くギアに届いた頃、ギアは自分がどれだけ走っていたのかを知った。

「ギアさまっ？」

「風詠！」

呼吸困難に陥り、疲弊に気づいた身体を、ギアは手放した。

08 ： わずかな、ぬくもり。

誰かを好きになって、愛することが、こんなにも大変なことだったなんて知らなかった。それは人生のすべてを左右するもので、とても大きな力で、ギアは強く揺さぶられる。

ああ疲れた。

そう思っても、溢れてくる想いは止め処なく、疲れている暇などどこにもない。

想いはいつでも常に、ぐるぐると、胸中を疼かせる。

「……まだ泣いていてもいい」

優しい声に、止まりかけていた涙がこぼれ落ちる。もう涙も枯れたと思っても、優しい声にまた涙は込み上げた。

「だからいやなんだ……風詠は、苦しい選択をする」

苦しくなんかない。

そう、以前なら言えた。

今はもう言えない。

「楽土の、言う、とおりだった……っ」

アノイの言葉は、嘘ではなかった。本当だった。今になってそれがわかるなんて、気づくのが遅過ぎだ。

「どうしよう…っ…どうしよう、楽土。わたし、シゼさまが好きだ…っ…シゼさまが」

「素直になればいいだけだ」

「でも、シゼさまは、わたしのこと好きじゃない……っ」

「そうと決まったわけではない。ちゃんと聞いたか？」

「聞いた…っ…聞いたよ…っ…縁談、断るためって」

「風詠……それはちゃんと聞いたとは、言わない。風詠の解釈が、違っている場合もある」

「でも、シゼさまがそう言った……っ」

想われていないことが、こんなにも寂しくて悲しいことだなんて、言葉にして聞くとよくわかる。失恋した、とは思っていたが、そのとき以上に寂しくて悲しくて、もう死んでしまいたい。

「いやだ…っ…もういや」

考えたくない。

けれども考えてしまう。

好きで、好きで、どうしようもなく好きで、どうしても考えてしまう。どうしても想ってしまう。

こんなに寂しくて悲しいなら、それを捨て去って忘れてしまえばいいのに、それができない。

魔導師とは不自由なものだ。

「風詠……」

ぼろぼろと流れ落ちる涙は、意識を手放してから運ばれた寝台の

上に、染みを作っていく。その涙の一滴を拭って、アノイが頬を撫でてくれた。

「泣き止めとは言わない。もっと泣いていい。だが、すべてを投げ捨てないでくれ」

そろりそろりと、頬を撫でてくれるアノイの手つきは優しい。心の底からギアを心配してくれていると、それがわかる。アノイに要らぬ心配をかけていると、それもわかるのに、今の自分をどうしようもできない。

悲しくて、悲しくて、空しくて寂しくて、身の置き場もない。

どうしたらいいだろう。

「風詠、だめだ。泣いていい、悲しんでいい」

「らくど……っ」

「堕ちるな、風詠。捨てるな、忘れるな、風詠」

アノイが泣きそうな顔をしている。そうさせているのはギアだ。アノイにそんな顔をさせていいわけがないのに、どうして、わかっているのにそれができないのだろう。

ああもうわたしは最低だ。

魔導師だから仕方ないなんて、そんな言い訳はできない。アノイに悲しい顔をさせていいわけがない。ギアのことに、アノイを振り回してはいけない。

わかっているのに、シィゼイユのことが頭から離れなくて、涙が溢れて止まらなくなる。想いも、溢れて止まらない。

いっそ、過去に戻れたら。

そうして、シィゼイユと出逢わなければ、よかったのかもしれない。それも悲しくて寂しいことだけれども、生きていく一生をこの悲しくて寂しい想いを抱えていかなければならないのなら、すべて

白紙に戻されたらいい。それが無理なら、すべてを忘れてしまえたら、ギアはただの魔導師として生きていけた。シィゼイユに恋をするという、あってはならない想いを抱えることなく、魔導師として一生を過ごせたかもしれない。

あるいは、恋する相手が、シィゼイユでなければ。

なぜこんなに、シィゼイユが恋しいのだろう。

あのとき、ギアひとりが、シィゼイユの弱音を聞いてしまったからだろうか。

「ひどい…っ…ひどいよ、シゼさま」

恨みたくないのに、恨んでしまいたくなる。ギアにこれほどの想いを抱かせたシィゼイユを憎んでしまう。愛憎は表裏一体だというが、その通りだ。

いとしさが、憎しみに変わってしまう。

「言いたいことは、すべて、言ってしまえ。それでいいんだ、風詠」

言いたいことは、余すことなく吐き出してしまえと、アノイは言うけれども。

それならギアから出てくる言葉は、シィゼイユへの想いだけだ。それ以外、ギアの口からは出てこない。

こんなにも強い想いを抱いていながら、想うだけで充分だなどと、よく言えていたものだ。

「アノイさま、アノイさま」

「……レム？」

「ロザヴィンさまがいらせられております。どうしますか？」

「雷雲が……うん、通していい」

「わかりました。ではこちらに。お茶でも用意しましょうか？」

「頼む。風詠には温かいものを」
「少しお待ちください」

寝台に顔を押しつけて、ぼろぼろとこぼれる涙を吸わせていると、どっかりと誰かが腰かけたように寝台が揺れた。少しだけ顔を動かしてそちらを見れば、不機嫌そうな顔をした雷雲の魔導師ロザヴィンが、じっとギアを見下ろしていた。

「あ……」

いやだ、逢いたくなかった、と思ったのは、ロザヴィンがシィゼイユの幼馴染で、とても仲がいいと聞いていたから。
僅かに身を引いたギアに、しかしロザヴィンのほうは気にした様子もなく表情を変えない。

「面白ぇこと、教えてやるよ」
「……な、に」
「だから代わりに、あんたも教えろ。そうだな、先にあんたから話してもらおうか」
「……なん……の、こと」

問いかけに、ぐるぐると思考が混乱の渦を巻く。
「たとえどこにも、嘘がなくても……語られなかった真実は、どこかにあったはずだ」

そうだろう、とロザヴィンに問いかけられる。意味がわからなかった。

「あんた、言わなかっただろ」

「……なにを」
「どうしてなにも言わずに出て行ったんだ、とか」
「え……？」
「あんたには言う権利があったのに、あんたは言わなかった。違うか？」

なにを言われているのか、本当にわからなかった。それがシィゼイユのことだと、あの日誰にもなにも語ることなく国を出て行ったことへのものだと、気づいたのはロザヴィンの雰囲気を感じ取ってからだった。
ロザヴィンは、静かに、怒っている。

「その前でもいい。あんたは聞いたはずなんだ。けどあんたは、立場を気にして言わなかった。言えばよかったのに」

もしやそれは、あの弱音のことだろうか。あれには、やはりとても深い意味が、あったというのだろうか。

「五年……いや、もう六年になるか。あの人の忍耐力も対外だ。そろそろ、限界だろうな」

ハッとした。それはまるで、なにかが起ころうとしている、その予兆のように聞こえた。

「どういう、ことだ……雷雲、それは、いったい」
「あんたの目にはどう映る」

こちらを見てくる灰褐色の双眸は、静かな怒りを含んで、ギアを責めてくる。どうして気づかなかった、どうしてわかろうとしなかった、どうしてきちんと聞かなかったのだと、そしてなぜ言わなか

ったのだと、ギアを捲し立てている。

「あんたの目にあの人は……シゼさはまどう映るんだ？」

問われたことの意味が、まるでわからなかった。

「目に……って」

「あんたは知ってるはずなんだ」

「知ってる……なにを」

「シゼさまの、本当の心だ」

それは、とギアは黙り込んで脳裏にあの日のことを思い出した。

『すごく、寂しくなる……心にぽっかり穴が開いて、どうしようもなく締めつけられて、それで、苦しくなる。温かいものを見ていると、感じていると、どうしても……寂しくて悲しくなるんだ』

シィゼイユの、おそらくは最初で最後の、弱音。ギア以外に聞くことがなかった、シィゼイユの本当の想い。ギアがそのとき思ったことは、彼が強くて弱い人だということだ。

「……ほらな、あんたは知ってんだ」

にやりと、ロザヴィンは笑った。不敵なそれは、しかしすぐに、優しげな眼差しに変わる。

「あんただけは、気づいたんだ。シゼさまが、消えてなくなりたいとか、そういうことを考えて生きてるってことに。おれは、気づけなかったけどな」

ギアは、確かに気づいていた。シィゼイユの弱音が、彼の生き方に対するものであることに、気づいたからこそ強くて弱い人だと、思ったのだ。

「面白ぇこと、教えてやるよ」

ロザヴィンは、来たときと同じ言葉を口にした。

「ただ、あんたにとって面白ぇかどうかは、あんた次第だ。おれが面白ぇと思ってるだけだからな」

面白い、と言いながらも、言い渋るようにロザヴィンは肩を竦め、けれどもその眼差しは変わらず優しげだった。

「シゼさまが今までずっとひとりだったのも、いきなり姿を消したのも、国のためじゃねえ。たったひとりの、不器用な魔導師のためだ」

ロザヴィンのそれは、ギアの苦しんでいる心に、僅かなぬくもりを与えるものだった。

09 ： 雨降る天に涙した。

雨が降っていた。雨季でもないのに長く続いている雨は、その状態から被害が大きく及ぶだろうと予測が立てられ、魔導師たちに警戒令が出た。王都にいる魔導師は外出を控え詰所にて待機させられているが、数人はすでに街の外に派遣され、周辺の被害状況を調べ始めている。その報告には、多少の被害はあるが拡大することはなく、雨脚も強まることはないという、とりあえず一息つける調査結果があった。それでも、国を覆う雨雲が消える気配はなく、陰鬱とした日々が人々の心を不安にさせていた。

多くの人々を不安にかき立てる空を眺めながら、その冷たい雨の中に身を投じた青年がくすりと笑う。

「わたしは随分と排他的でね……世の中が、とても嫌いなんだ」

急に大きなひとり言を始めた青年は、しかし己れの背後に確かな人の気配を感じていたようだった。

「綺麗な世界だと思うこともある。この世界に産まれてよかったと思うこともある。それでも、わたしは世の中が嫌いでどうしようもなかった。理由なんてない。ただ、嫌いなんだ。自分の存在が許せなくなるほどに……」

空を眺めていた青年が、ゆっくりと肩の力を抜き、背後を振り向

く。

「きみは気づいていたよね……ギア？」

振り向いた顔は、ひどく寂しげで悲しげで、ギアはどう声をかけたらいいのかわからなかった。わからなかったけれども、彼がひどく、なにか温かいものを求めていることだけは、はっきりとわかった。

「お風邪を、召されます。お戻りください、シゼさま」
「きみこそ、風邪を引くよ？」
「わたしはいいのです。シゼさまのほうが」
「わたしが大事か？」

どきりと、した。あのときのように、消えてなくなりそうな気配が、したからだ。

「ねえギア？　わかる？　わたしが、どれほど、世の中を嫌っているか。どれほど、自分を忌まわしいと思っているか……きみはわかる？」
「お……お戻りください、シゼさま」
「ばかだね、ギア。それは答えではないよ。ちゃんと質問に答えないと」
「シゼさまっ」
「そんな泣き腫らした顔でわたしの前に現われるなんて、なんの余興だい」

ぐさりと刺さる言葉に、ギアは僅かに怯む。シィゼイユがめちゃくちゃなことを言っているという、その恐怖がギアを怯ませているのだが、そうさせたのは自分だと、ギアはもう自覚している。そう

させていることが、嬉しいとも思っている。
自然、涙が溢れた。
「……まだ泣くの？」
「お、戻り、ください…っ…シゼさま」
「いやだよ。わたしはこのまま死んだってかまわないんだから」
「シゼさま！」

いったいどれだけの間、雨に打たれ続けているのか。シィゼイユが吐く息は白く、またギアの吐く息も白い。寒い季節ではないのに、それを促している雨が、シィゼイユの身体から体温を奪いつつある。どうにか雨だけでも凌いで欲しいのに、シィゼイユはまるで聞いてくれない。
そこまで、追いつめた。
知らぬ間に、追い込んだ。
喜びと一緒に深い後悔がギアを襲う。

「ねえギア……わたしがどれだけ待っていたと思う？　このときを、この瞬間を、いったいどれだけ待ち望んでいたと思う？　大嫌いなこの中で、わたしにとってそれだけが光りだったんだよ？　それを打ち砕かれたわたしは、もうここに未練はない」
「シゼさま……っ」
「きみが、わたしを好いてくれた。それはわたしの光りだ」

ぐっと、ギアは息を呑む。
「けれど……待っていたのに、打ち砕かれた」
自嘲気味に、シィゼイユは笑う。
そんなことはないと、首を左右に振ることができたのは、ギアに

もたらされた喜びだ。

「いや…っ…いやだ…っ…行かないで」

「……わたしはもうどこにも行かないよ。待つことには、疲れたからね」

「いや！」

そうじゃない、とギアは否定する。

そうじゃない、そうじゃないのだ。ギアの心が、いけなかったのだ。全身で表現していたくせに、隠そうとして、与えられた好機にも目を背けてしまった。立場や環境ばかりに気を取られ、本当の心を、言葉を、伝えなかった。そうしてもいいという立場なのに、だからこそ駄目なのだと、無理やり自分に言い聞かせた。

どだい、無理なことだったのだ。

ギアが、魔導師で在る限り。

緑の自然に、囚われ続けてしまうように。

「行くなら、わたしも……わたしを、置いて行かないで」

「わたしがきみを？　はっ……ありえない」

肩を竦めて笑ったシィゼイユが、眩しいものを見ているかのように眼を細めた。

「わたしはきみを攫うために戻って来た。この世界から、きみという存在を奪うためにね」

想いが胸に詰まる。涙が溢れて止まらなかった。

「なにをそんなに泣く？　わたしが怖い？　はは、怖いかもしれないね」

怖くなんかない。そう口にしたくても、嗚咽に邪魔されてしまう。だから必死に首を振るしかなかった。

「わ、たし……っ」

「……泣かないでよ、ギア」

「シゼ…っ…さま」

「壊れたいのに……きみが泣くと、壊れてなんていられなくなる」

危うい場所に、シィゼイユはずっといた。それは誰がそばにいても、そうだった。誰も彼の心を引きとめられなかった。どこか遠くを眺めているその眼差しを、誰も追うことができなかった。

けれども、ギアは違った。初めから、違っていた。

シィゼイユの空っぽな心に、ギアは気づいた。

「好きです……っ」

「ん？」

「わたしは、シゼさまが、好きです」

どうにか嗚咽をこらえ、想いを口にする。ずっと抑え込んでいた想いを一度でも口にしてしまえば、その壁は脆くも崩れ去る。

「どうすれば、わたしは、あなたをお支えすることが、できますか……っ？」

一歩踏み出し、ギアは自ら雨の中へと身を投じる。勢いが弱まっているとはいえ、冷たい雨はそれだけでギアからぬくもりを奪い、急速に冷えを与える。

「わたしは、あなたのそんな顔、もう見たくありません…っ…ずっ

と、笑っていて欲しいです」
「……簡単なことだよ」
ふっと笑ったシィゼイユが、雨に濡れたその身体を、無防備にギアへ曝した。
「わたしの妻になればいい」
広げられた両腕は、ギアを待っている。
「わたしをこの世で生かしているのは、きみだからね」
ふふ、と微笑む姿は、悲しみや寂しさを隠していた。しかし、ギアには隠し切れていない。
「シゼさま……っ」
どうしたらわたしは、この悲しくて寂しい人を、包み込むことができるだろう。
ギアは駆け出し、待っているシィゼイユの腕に飛び込んだ。
「ああ……漸く言ってくれたね、ギア」
「シゼさま、わたし……っ」
「待ちくたびれたよ」
ギアを拒絶することなく、迎え入れてくれた両腕に、強く抱きしめられた。
「待ちくたびれたんだよ、ギア……っ」

小刻みに震えたシィゼイユの腕は、それでも確かにギアを抱き込み、離すまいとする。泣いていると、そう気づくまで時間はかからなかった。

「シゼさま……」

「なんて不器用な、魔導師だろう……っ」

ああどうして、気づかなかったのだろう。あの横顔には気づいたのに、言葉には気づいたのに、どうしてこれに、気づかなかったのだろう。

「待たせて、ごめんなさい…っ…シゼさま」

求められていることに、どうして今まで、気づかずにいたのか。

いや、気づくわけもない。

『あの人もかなり歪んでるからな。自覚ねぇけど』

排他的だと自分で言いながら、破綻した心があることに、シィゼイユは気づいていない。ロザヴィンの言葉が当たっているなら、立場や環境を重んじて雁字搦めになっていたギアにだって気づけるわけもないのだ。

「好き……好きです、シゼさま。わたし、シゼさまが」

「そんなの初めから知っている」

これまで言えなかった分を吐き出そうとすれば、もう言うなとばかりに唇を塞がれる。その行為が嬉しくてまた涙を流せば、もう泣くなとばかりに目許へと口づけされる。

「シゼ…っ…さまぁ」

「ああ、ひどい顔……可愛いね、ギア」

未だ降り続ける雨は体温を奪う。それでもギアは、このひどく温かいぬくもりに歓喜し、雨降る天に涙した。

１０　：　この世界が見えるだろうか。（前書き）

＊シィゼイユ視点です。
前半は過去、後半は現在『０９：雨降る天に涙した。』の後日談になっています。

１０　：　この世界が見えるだろうか。

小さいものが、目の前をころころと転がっていく。自分もまだ小さいほうではあるが、目の前の小さいものより確実に五つは歳上だ。

『……なにをしているの、ギア』
『あ、シゼさま』
『？　草まみれだよ？』
『うん。土がやわらかくて、おちつかないんだって』
『落ち着かない？　誰が？』
『草花が』

ころころと、小さいものはまた転がる。自分が草まみれになっても、泥だらけになっても、かまうことはない。きっと母親に怒られるだろうに、それでも小さいものは転がり続ける。

『シィゼイユ殿下、いかがなされました』
『ああ、カザリア。いや、あれだよ』
『はい？　ああ、ギアが転がっていますね』
『いったいなんの儀式？』
『遊んでいるだけだと思いますよ』

カザリア・チェリングは、小さいもの、ギアという少女の父親だ。娘が不思議なことをしているのに、彼の目には「遊んでいる」ようにしか見えないらしい。寛容な心も広過ぎると少し問題になるので

はなかろうか。

『うーん……それにしても意味深な言葉』
『意味深？　ギアがなにか言いましたか？』
『土が柔らかくて落ち着かないそうだよ。草花がね』
『……ああ、そういうことですか』

カザリアはなにか思い当たったらしい。

『なに？』
『魔導師の力があるからですよ』
『……、魔導師？』
『ええ』
『ギアが？』
『はい』
『うそでしょ』
『嘘は嫌いです』
『……落ち着いているね？』
『わたしにはどうでもいいことですからね』

ふつうに吃驚したのだが、カザリアの様子は変わらない。本気で「どうでもいい」ことらしい。

『……ギアに魔導師の力があるなら、師を見つけないと』
『誰がいいですかね？』
『誰にギアがそうだと教えられたの？』
『陛下です』
『あー……ロルガルーンに紹介してもらうといい』
『わかりました』

相談しておきながらあっさりとしたものだ。

『……カザリア』
『はい』
『一緒にはいられなくなるよ』
『そうですね』
『いいの？　ギアは……まだ五歳だ』
『嫁さんにもうひとり産んでもらいますよ』
『それはギアにひどくないかな』
『そうですかね』
『……きみの愛情はよくわからない』
『よく言われます』

感情をどこかに置き忘れたような顔をして、カザリアは暢気にも娘の将来を野放しにする。顔が似ていなければ、カザリアとギアが一緒に歩いていても、きっと親子には見えない。

『さて……殿下、わたしはこれで失礼させていただきます』
『ああうん、それはかまわないけれど……ギアはどうするの？』
『殿下にお任せいたします』
『え』
『では』

カザリアは、よくて放任主義、悪くて無関心、といった態度の父親だ。けして鏡にしてはならない。あんな父親はいやだなぁと、常々思う。

『お任せって……え？　どうすればいいの？　通りかかっただけなんだけど』

たまたま通りかかったところで、小さいものが転がっていた。それがギアという、見知った少女であったから声をかけただけだったのだが、そこをまた通りかかったカザリアに任されてしまった。どうしろというのだろう。

『ギア』
『はーい』
『いつまでそれやるつもり？』
『もうすこしー』
『……そう』

自身が満足するまでなのか、それとも「落ち着かない」という草花が満足するまでなのか、ギアはあっちへ行ったりこっちへ来たり、繰り返し転がる。ただ見ているだけでも不思議な行動だが、魔導師の力があるというならわからなくもない行動だ。

『ギアは、緑の声が聞こえるんだね』
『きこえるー』
『どんな感じ？』
『おちつかないって、いってるー』
『……五歳児に説明は無理か』
『シゼさまもいっしょにやるー？』
『やめておく。母上に殴られたくないからね』

任せられてもただいることしかできないが、まあ暇だからいいか、と近くの石椅子に腰かけ、ギアの行動をしばらく眺めることにする。
昨晩まで雨が降っていたせいか、今日の空気はとても澄んでいて、世界が洗われたように感じる。ギアが転がっている場所も、ギアが転がることで潰れるどころか、生き生きと背伸びしている。被害のない雨というのは珍しい。まさに恵みの雨というやつだ。

『シゼさま、おべんきょうは？』

満足したらしいギアが、転がるのをやめてそばに寄ってきた。

『終わったよ。もういいの？』
『くすぐったいの、よくなったって』
『そう。じゃあ……その恰好、どうにかしようか』
『かっこう？』
『草まみれ泥まみれ。お母上に怒られるよ？』

ギアは女の子だ。せっかくの衣装が草まみれの泥だらけでは、娘を想って着せた母親が可哀想だ。

『このままでいいよ。よごしたの、わたしだもん』
『なら、せめて手と顔を洗おうか。あと、髪も結い直したほうがいいね』
『いい。このままかえるから』

放任主義な父親にくっついて来るくらいなので、ギアはしっかり者だ。帰る、とひとりで歩き出してしまう。

『待ちなって、ギア。帰るなら送るよ』
『だいじょうぶ。すぐそこだもん』
『すぐ……ああ、カザリアの部屋か』

父親の部屋が、帰る場所であったらしい。考えてみれば、確かにすぐ近くには宿舎がある。カザリアは常に忙しい財務局の仕官なので、宿舎には仮眠用の部屋が用意されているのだ。

『家には帰らないの？』
『おまえだけかえるのはずるいって、とーさまが』
『ギアだけ？』
『よくわかんない』

もしかしたら、とすぐにその可能性を思いつく。カザリアは奥方と喧嘩でもしたのだろう。ギアはそれに巻き込まれているのだ。

『やっぱりカザリアの愛情はよくわからないな……』

可愛い娘を味方につけて、奥方の気を惹こうとしているのだろうカザリアの手口に、半ば呆れたため息が出る。娘の都合など関係ないという姿も、なんというか呆れてしまう。あれでよく恋愛結婚などできたな、と思ってしまうのも仕方ないだろう。

『……、ギア？』

カザリアの部屋に向かっていたギアの足が、ぴたりと止まる。こちらをじっと、見つめていた。

『どうしたの？』

ギアに問われた。それはこちらの台詞だと、苦笑して返す。

『わらいたくないなら、わらわなくていいのに……』

ギアからこぼれた言葉は、ひどく心臓に悪かった。

「わたしはたかだか五歳の子どもに殺されるのかと思ったね」
「え」
「とはいえ、その当時わたしも十歳くらいで、充分子どもだったけれど」

それでも心臓に悪かった。たった五歳の少女に、おとなを誤魔化すことができた嘘の笑みを見破られたのだ。騙せないらしいということに、唖然とした。それは今でも記憶に鮮明だ。

「わ、わたし、そんなに深い意味は、なかったと思うんですが……」
「うん、まあ、子どもは素直な生きものだからね。わたしが素直な子どもではなく、捻くれた子どもとして育ったから、その違いに吃驚したというか、そんなところだよ」
「わたしはシゼさまを驚かせたのですか」
「死ぬかもしれないと思ったくらいには」
「！　す、すみません……」

おろおろとするギアは、シィゼイユに強烈な驚きを与えた五歳の頃から、随分と変わった。幼い頃は立場など関係なかったし、もしかしたらギアが魔導師にならなければ、それは今日まで変わらない姿だったのかもしれない。あのままギアが成長していたら、この関係も変わっていただろう。

「ギアが魔導師なのは、許せないことだしね……」
「は、い？」
「いや、なんでもない。きみがきみだから、わたしはきっと、きみがいる世界には生きてみたいと思ったのだろうね」
「わたしがいる、世界？」
「きみがいるか、いないか、それでわたしが見ている世界は随分と変わるんだよ」

この世界が見えるだろうか。
なにも感じなかった世界に、さまざまなものを感じるようになって、音が聞こえるようになって、色彩が鮮やかになって、肌に雨を感じたときの喜びといったら表現の仕様がない。
恋に墜ちたのだ、とすぐにわかった。
世界が艶やかになったのは、いとしいと想うものができたから。
素直に好きだと、想うものができたから。

「わたしは、シゼさまをお支えすることが、できますか？」

シィゼイユはくすりと笑って、ギアの額に手のひらを添えた。

「まずはその風邪を治してから、ね」

にこりと微笑めば、熱のせいで潤んだ瞳が柔らかくとろけ、嬉しそうに口角が上がった。

「わたしのほうが雨に打たれていた時間が長かったのに、どうしてきみが風邪を引くかな」
「すみません」
「まあいいよ。わたしは薬師だからね。治してあげる」
「はい、ありがとうございます」

「……ギア」
「はい」
まっすぐ見つめてくる潤んだ瞳は、ひどく危うい。
「……わたしの奥さんに、なってくれる？」
問えばとたんに涙が溢れ、枕を濡らす。
「わたし、シゼさまが好きです……どうしたらいいか、わからないくらいに」
「わたしを見ていてくれたら、それでいいよ。わたしと一緒にいてくれたら」
「あ、あのっ」
「ん？」
「どうして、いきなり、いなくなったんですか？」
「……ああ、留学？」
「わたし、帰ってきていたことも、知りませんでした」
寂しかった、とくしゃりと顔を歪めるギアに、シィゼイユは苦笑する。
「ちょっと行き詰っていてね……情けないことだから、気にしなくていいよ」
「でも……」
姿を暗ませていた間のことが、どうしても気になるらしい。けれども、それを詳しく話すにはもう少し、時間が欲しい。たとえ時間が多くあっても、今のギアに聞かせていいものでもない。

「いつか、話すときがくる……そのときが来たら、たぶんきみは、わたしの言いたいことがわかると思うから」
「……ほんとうに？」
「必ず」
「約束、してくださいますか？」
「それできみが安心するのなら、いくらでも」

さらりと額を撫で、そのまま滑らせて頬も撫でる。安堵したようにギアが瞼を閉じるのを見て、シィゼイユは笑みを深めた。

１０　：　この世界が見えるだろうか。（後書き）

これにて【雨降る天に涙した。】は終幕となります。
ここまで読んでくださりありがとうございました。

次話からは番外編となります。
おつき合いくださると嬉しいです。

１１　：　愛を疑わない。（前書き）

＊シィゼイユ視点で始まります。

11：愛を疑わない。

幼い頃、淡い恋心を抱いた。とても淡いものだ。好きなのかな、と。
それは初恋、だったかもしれない。
いや、あれは初恋だったのだろう。
淡い心が、幼いながらも、凍りついたのだから。

「エルティ……」

夕焼け色のさらさらとした髪が、いつも風になびくたび綺麗だと思った。
風に流れる髪を押さえて、心地よさそうに微笑む姿が綺麗だと思った。
にこにこと、嬉しそうに子どもたちを眺める優しい瞳が、綺麗だと思った。
彼女はいつも笑っていた。
どうしていつも笑っていられるのだと訊いたら、彼女はやはり笑いながら、幸せでいたいからと答えた。彼女は幸せの中にいたのではなく、いつまでも幸せでいようとしていた。
そんな彼女を嫌いに思うことなんて、一度としてなかった。
「こんなときでも、あなたは笑っているんだね……エルティ」
白い棺の中で、眠りについた彼女は微笑んでいた。

彼女の最期の言葉が、耳に焼きついて離れない。

「そうだよね、だいじょうぶだよね……おれが、いるんだから」

眠りにつく間際まで、彼女は子どもたちのことを案じていた。自分のことよりも、子どもたちのことを考えていた。特に、彼女と同じ力を持ってしまった末の子を、彼女は心配していた。

「だいじょうぶ、殺させやしない。おれと、姉さんと、シャンティンが護るから」

両膝をついて、棺の中で眠る彼女に、彼女が好きだった白い花を添える。だいじょうぶだから、と囁き、彼女の冥福を祈った。

そうして。

「浄化の白炎を」

棺の蓋が、ゆっくり閉められる。姿を隠された彼女は、移動した場所で青白い炎に包まれた。

「おやすみ、エルティ」

彼女が愛した家族ではなく、彼女と同じ力を持つ者たちに見送られて、彼女は天へと帰っていく。ときおり晴れ間を見せる空から降った雨は、まるで彼女を迎えに来た光りのようだった。

エルティエン・ゼス・バルセクト。

彼女ほど慈悲深く、そして容赦ない力を揮う魔導師は、もういない。

若くして病に侵され伏した魔導師が、今、天に召される。

「さようなら、エルティ……」

またどこかで逢えたなら、きっと次こそは、この想いをあなたに伝えよう。

だから今は、おやすみなさい。

そして、さようなら。

「エルティ、慈光の魔導師よ」

涙は要らない。

あなたはきっと、笑っていて欲しいだろうから。

悲しまないで欲しいだろうから。

微笑んで、あなたを見送ろう。

彼女を天へ返す白炎が消える前に、背を向けた。

泣かないと決めたから、微笑んでいようと決めたから、彼女が消えた悲しさや寂しさに押し潰される前に、彼女が最期のときまで気にかけていた子どもたちのところへと向かった。

彼女は魔導師としての力がすごかった。強いのではなく、その使い方がすごい人だった。だからだろうか。彼女の息子も、力の使い方が極端だ。彼はまるで彼女の生き写しで、彼女が亡くなってから

寂しくて悲しい気持ちでいっぱいだったのが、今ではそれもいい思い出になっている。

「アサリちゃんをかまっていたのは、エルティに少し似ているからだよ」

笑って思い出を語ると、ギアがほんの少しだけ、不安そうな顔をした。言うまでもなく、思い出を語るシィゼイユの心を疑っているのだろう。

「なに、その顔？」

わざとらしく訊ねると、ギアは表情を読まれまいとするように俯く。

「すみません……」
「なにを謝るの？」
「いえ、あの……わたし」
「ギア？」

少し意地悪だろうか。それでも、どんな表情でも、見逃したくはないからギアを追いかける。

涙目のギアは可愛いと思う。エルティは人を泣かせたくないと思わせる人だったけれども、シィゼイユはギアなら泣かせたいと思ってしまう。たぶんそれは、真実いとしいと想うギアだからだ。

どんな涙も、ギアが流す涙はわたしのものだ。それがいとしいと想う心の答えで、エルティには抱かなかった想い。

疑わなくていいのに、とシィゼイユは笑う。けれども、存分に疑うといい。その心もシィゼイユのものなのだ。

「慈光さまのこと……お好きでしたか？」

上目遣いにシィゼイユを窺いながら、ギアは漸くその疑いを向けてくる。笑みを深めてやった。

「好きだったよ」

「そ……ですか」

明らかに落ち込んでみせるギアに、笑いを抑えられない。きっと今頃、自分とエルティを比べているに違いない。

可愛いなぁと、想う。

「趣味悪ぃよ、あんた」

よい頃合いだが、その言葉はひどい。

「余計なお世話だよ、ロザ」

ギアの表情を楽しんで見ていたのに、その趣味を悪く言われたくはない。けれどもエルティの息子は、そのあたりが彼女によく似ている。

「おい、風詠。あんましシゼさまの言葉、鵜呑みにしねぇほうがいいぞ。てか、八割は遊んでるから、信じるほうが阿呆くせえ」

「失礼な」

「ほんとのことでしょ」

「全力だよ」

「遊んでること否定しろ！」

ギアもそうだが、ロザヴィンを揶揄するのもなかなか楽しい。

「あんた、風詠に嫌われたいんですか？」
「ギアがわたしを？　はん、あり得ないね」

シィゼイユはギアの想いがどれだけのものか、知っている。魔導師とはそういう生きものだ。ロザヴィンはエルティがそうだったように否定するが、否定しようなく自分がそうであることは自覚している。

魔導師は愛することに直線的で、そして臆病で、けれども純粋だ。だから。

シィゼイユは、ギアからの愛を疑わない。

それがシィゼイユを、この世界から救っている。

「ところでロザ、ギアになにか用？」
「風詠じゃなくてあんたですよ」
「おや、わたしかい」

てっきりギアに仕事を持ってきたものと思っていたのだが、ロザヴィンの目的はシィゼイユであったらしい。

「病み上がりをすぐに働かせるほど、今は困窮しちゃいねぇですよ」
「わたしは魔導師の伴侶だよ？」
「残念でしたね。あんたが王都にいるうちにって、そっちのほうが優先されて」

今すぐ帰ってやろうかと思ったが、女王である姉ユゥリアに王族の義務すべてを押しつけてしまったという罪悪感は、少なからずシィゼイユの裡にある。ユゥリアはまったく気にしていないが、それでもシィゼイユのことで随分と骨を折ってくれているのだ。

「姉上にギアのことも頼んでしまったしね……仕方ない」

ユゥリアの伴侶もまた魔導師、シィゼイユは激しく奴が気に喰わないが、姉の気持ちは理解できる立場にある。

ギアで遊ぶのはこれまでにして、シィゼイユは腰を上げた。

11：愛を疑わない。（後書き）

楽しんでいただけたら幸いです。

１２　：　やさしいひとたち。（前書き）

＊ギア視点で前話から続きますが、閑話っぽいです。
もしくは嵐の前の静けさ（っぽい話）です。

12　：　やさしいひとたち。

聞いたか、とロザヴィンに問われて、ギアは首を傾げた。
「なにを？」
「いなくなった理由」
それが今のことではなく、昔のことを言っているのだというのは、すぐにわかった。
ギアは力なく首を左右に振る。
「いつか、わかるときが来ると……そう言われた」
「ふぅん……出し惜しみか」
「雷雲は知っているのか？」
「おれ？　おれが知るわけねぇだろ。あのな、あんたがなに勘違いしてっか知んねぇけど、おれはあの人に弟みたく可愛がられちゃいるが、あんたが思ってるほど親しくはねぇんだよ」
「え……そうなのか？」
そうだよ、と言いながら、ロザヴィンは窓辺近くの椅子に腰かけ、ギアに断りもなく窓を開けると、懐から紙煙草を取り出して火を点けた。暇なのかそうでないのか、とにかく休養中であるギアの話し相手をするつもりらしい。
「……雷雲」

「あ？」
「仕事はいいのか？」
「片してきた」
「……そうか。帰ったほうがよくないか？」
「家に親父が来てる。から、帰りたくねえ」

仕事を終えても帰りたくない事情があるらしい。

「もう少ししたら楽土が来るんだが……」
「ばーちゃんは暇してんもんなぁ」
「雷雲……それは楽土に失礼な発言だ」
「ばばぁだろ、楽土は」

アノイが来ると言っても、ロザヴィンは動かない。家に帰りたくはないが、かといってひとりになりたいわけでもないのだろう。むしろ今は同じ魔導師と一緒にいたいのかもしれない。
なにかあったのだろうか、と心配したところで、部屋の扉が軽く叩かれる。返事をすると、アノイが顔を見せた。

「おや、雷雲……なんだ、揃うな」
「揃う？」
「堅氷を連れてきた」

アノイは、女王ユゥリアの夫でもある最強の魔導師、カヤを伴っていた。こちらもなにか事情を抱えているようで、常に無表情ではあるが、一段と表情がない。

「……いったいどうした」

一つの部屋に四人もの魔導師が揃うのは、珍しい。なにごとだと

驚くのも無理はないだろう。

「シィゼイユと婚姻を交わしたと、聞いた」

お茶でも用意しようかとギアが席を立つと、無表情のカヤがそう口を開いた。

「だいじょうぶなのか？」

それはなんの心配だと、ギアは苦笑する。

「堅氷は無闇に優しいな」

「違う。いやなだけだ」

「陛下の弟君だから？」

「おれたちはふつうには生きられない。それが、いやなだけだ」

カヤが言うこともわからなくはない。魔導師は、緑に囚われて生きる者だ。

「魔導師を辞めたくなるだろう」

「辞められないと、わかっている」

「その官服を脱ぐことはできる」

「……堅氷。これが、わたしたち魔導師だよ」

魔導師の官服を着ていようが着ていまいが、ギアは魔導師だ。魔導師であることを辞めることはできない。その力に目覚めてしまっている限り、力は使われ続ける。国が魔導師の立場を確立してくれているおかげで、魔導師は人間の生活を忘れずに生きていられる。

ギアは、魔導師である自分を否定しようとは、思わない。なんて厄介な生きものだ、と思うことはあるけれども。

「その台詞、わたしも聞いた」
「楽土？」

くすくすと笑ったアノイが、近くの椅子に腰かけて、意味ありげな視線をカヤに投げた。

「わたしも、レムに出逢って、堅氷に言われた。その官服を脱ぐことはできる、と」
「おれは言われたことねぇな」
「雷雲は縛られているものがわたしたちとは違う」
「まぁな。ま、言われても、おれもあんたらと同じ答えだ」

魔導師である自分を否定しようと思わないのは、ギアだけではない。アノイも、ロザヴィンも、言った当人であるカヤも本当のところは、魔導師だということを否定しない。自らが、厄介で面倒な生きものであることを、理解している。
魔導師は皆、そうやって、葛藤しながら生きているのだ。
ギアは肩を竦めて笑う。

「ラハルのお茶しかないが、それでいいか？」
「あ、おれ珈琲。挽いた豆は持ってきた」
「楽土と堅氷は？」

皆の答えに納得がいかないのか、それでも場を立ち去る気はない様子でカヤはため息をつき、「珈琲」と簡素に答えるとロザヴィンのいるほうへと足を進め、紙煙草をもらう。

「わたしはラハルのお茶がいい。手伝おう」
「ありがとう、楽土。雷雲、珈琲の淹れ方は？」

任せる、と言うロザヴィンから挽いた珈琲豆の小袋を受け取り、アノイに手伝ってもらいながら人数分の飲みものを用意する。茶器から湯気が立ち上ると、思い出したようにカヤが指を鳴らし、卓に茶菓子まで並んだ。

「用意がいいな」

とアノイが言うと、紫煙を燻らせながら「押しつけられた」とカヤは無愛想に答える。

「それ、陛下があんたとお茶したくて用意したんじゃねぇの？」
「風詠に。話をしに行くと言ったら、押しつけられた」
「ん？　それってつまり……あんたがふらっといなくなったりしねぇように、風詠に監視しろってことか」

え、と目を丸くしたら、その通りだったのか、カヤは不機嫌そうにそっぽを向いた。

「もう行くつもりだったのか、堅氷」

カヤには放浪癖がある。しょっちゅう行方不明になっては、なにかの拍子にひょっこりと帰ってきたり、息子たる王子アリヤに見つけられて帰ってきたり、昔からそれを繰り返していた。

「まだ、行かない。イチカが戻ってこないからな」
「ああそういえば、瞬花に逢った。奥さんと幸せそうにしていたが……戻ってくるとは、瞬花は王都に？」
「あれはアリヤの侍従だ」
「……引き離すのか」

魔導師を伴侶と引き離すなど、と顔をしかめながら淹れた珈琲を差し出すと、カヤは受け取りながら「仕方ないだろう」とため息をつく。

「あれは、アリヤの力の、器でもある」

「そのことだけどよ、堅氷。アリヤ殿下の魔導師の力、あんたほどじゃねぇよな？」

なにに疑問を抱いたのか、ギアから珈琲を受け取ったロザヴィンが、怪訝そうな顔をする。

「それがどうした？」

「器が必要だってんなら、あんたも必要になんじゃねぇの？」

「おれは要らない」

「じゃ、なんで殿下だけよ？」

「ユゥリアとの子だから」

「陛下との子だから？　なんだよ、それ」

意味がわからない、と肩を竦めたロザヴィンのそれには、ギアも頷く。アノイもそれは疑問に思っていたようで、「この際だからはっきりさせろ」と言った。

「わたしも聞きたいな……瞬花の眼が渦を巻いたような模様になっているのは、堅氷の呪いだと聞いた。アリヤ殿下の力を、瞬花に移すためのものだと。確かにアリヤ殿下の力は強いが、堅氷ほどではないだろう？」

「はっきりとしたことは、言えない。ただ、ユゥリアが王族で、おれが魔導師だから、アリヤはそうなった」

「そうなった、とは？」

「力に耐性がない」
「耐性？」
「負荷を、往なせない」

魔導師の力は、自然の力を借りることのできるものだ。それは緑を強制的に操るということではなく、緑に語りかけて理解を求めるということである。本来なら自然であるものをねじ巻けることも、語りかけることで理解してもらうのだ。だがそこには、当然だが歪みが出る。本来そうではないものを望んだものに変えるわけだから、その歪みは大きい。魔導師が力を遣うことで発生する歪み、それが負荷だ。負荷は、呪具を遣うことで回避したり、詠唱や錬成陣を遣うことで負担を減らしたりする。ギアが詠唱して風を操るのも、負荷が詠唱によって軽減、或いは回避されるからだ。

カヤの息子アリヤは、その負荷を自らの力で回避することができない、ということらしい。それなら負荷がかからないよう、力をどこかに封印してしまったほうが、身のためになる。

なるほど、とギアは頷きながら椅子に腰かけた。

「呪具では間に合わないのか」
「受け入れられるほどの呪具は、おれでも作れない」
「雷雲は？　雷雲以上に呪具創作に長けた魔導師はいないだろう」

ロザヴィンが創り出す呪具はすべて一級品だが、当人は「遊びみたいなおれの趣味で無理だって」と、己れを過小評価して取り合わない。

「試しに作ってみたら？」
「どれだけ時間かかると思ってんだ」
「……どれくらいかかる？」

「まず死ぬ」

生きている間には無理、ということらしい。つまり、それくらい難しいことでもあるわけだ。

「いろいろと……大変だな、堅氷」

言葉も尽きてそれくらいしか言えなかったが、カヤは気にした様子もなく軽く肩を竦めただけだった。

「堅氷だけじゃねぇだろ。あんただって、これからいろいろ大変だろうが」

と、ロザヴィンに言われた。

「わたし、が？」

「あのシゼさまの、嫁になったんだぞ」

「あ……まあ、それは」

「幸せぶち壊すようで悪ぃけど、あのひと、けっこういろんなもん抱えてっから、面倒くせぇと思うぞ」

それはわかっていることだ、とギアは苦笑する。ただ幸せに浸る、なんてことが、できるとは初めから思っていない。

「奇跡だと……わかっている」

「そういうことじゃねぇんだけど……まあ、ただ暢気に笑っていられねえって、わかってんならそれでいい」

心配してくれているらしい。もしかしたら、だからロザヴィンもカヤも、アノイも、今こうしてギアのそばに集まったのかもしれな

い。
優しい人たちだ。
「心配してくれて、ありがとう」
「べつに。魔導師ってのは、そういう生きもんだ」
魔導師は、魔導師にしか、理解できないものを抱えている。だからこそ、同胞を思う気持ちは強く、幸せになってもらいたいと願う。ギアが願うように、願われながら、同胞を想う。
「風詠」
「ん？」
「もう、苦しくないか？」
アノイからの問いに、ギアは微笑んだ。
「うん」

１３　：　嫌われるだけのことはした。１（前書き）

＊シィゼイユ視点です。

13　：　嫌われるだけのことはした。1

姉である女王ユゥリアの許へ行くと、初めに出迎えたのは王佐シャンテではなく、宰相補佐のレムニス・オルシアだった。

「きみは確かアノイの……」

「ああ、ご存知でしたか。レムニス・オルシアと申します。アノイの夫です」

よく知っているわけではないが、宰相補佐に引き抜かれた文官として、レムニスのその優秀さは耳にしていた。

「ギアがお世話になったね」

「こちらこそ、妻がお世話になっております」

魔導師の妻を持つ、という点では、レムニスに共感を持てるところがある。しかしギアがアノイと仲がよくなければ、こうして言葉を交わすことはなかっただろう。

「シャンテは？」

「宰相閣下と少し出られております。今日はもう戻られないかと」

「そう。じゃあ直接、姉上のところに行こうかな」

「ご案内します」

どうぞ、と部屋に通されて、案内されるまでもなく奥の部屋へと

足を進める。シィゼイユが来たことが伝えられると奥の執務室は扉が開けられ、レムニスと別れてひとり中へと入った。

「手伝いに来ましたよ、姉上」

「あなたを呼んだのは手伝ってもらうためではないわよ、シゼ」

ふわりと微笑んだ姉ユゥリアは、今日の政務は終えているのか、やけにのんびりとしている。だが、女官にシィゼイユのお茶を用意させると、すぐに人払いし、わざわざふたりきりの空間を作った。

「姉上？」

「まあ座って、お茶でも飲みなさいな」

「はあ……いただきます」

姉とふたりきりなんて、久しぶりだ。いつでもどんなときでも、人払いなんてことはしない。かならず女官がいて、侍従がいて、王佐シャンテがいるものだった。

「……どうしたんですか、姉上」

珍しいことをして、と目を丸くしながら訊ねると、少しの間だけ沈黙してこちらをじっと見つめてきたユゥリアは、不意に悲しげな顔をした。

「お呼びよ」

とだけ、言われて。

初めは意味がわからず首を傾げたが、悲しげな姉を見ているうちに、はっと、唐突に意味を理解した。

「……今さら、ですか？」
「そう、今さら」
ユゥリアは苦笑し、椅子に深くもたれてため息をついた。
「あなたが王都に姿を見せたのだもの。いずれは、とわかっていたことだけれど……本当に今さらだわ」
「……それで、姉上はなんとお答えしたのですか？」
姉の答えが気になったのは、弟だから、だった。
「わたくしのことを認めていない人よ？　一方的な命令をするだけに決まっているでしょう。答えようもなかったわよ」
「それは……苦労をかけましたね」
シィゼイユも苦笑し、脱力しながら長椅子に腰かけた。
ユゥリアがわざわざふたりきりの空間を作ったのは、この話をするためだったのだろう。人払いしてもらっていてよかったと、シィゼイユは息をつく。
「どうする？」
「と、訊かれても……姉上に迷惑はかけられませんし、とりあえず呼出には答えておきましょうか」
「迷惑なんて感じないわ。あなたのことだもの。無理しなくていいのよ、シゼ」
「そろそろいいかと思って王都に戻ったわたしが愚かだったんですよ。やっぱり戻るべきではなかったですね、わたしは」
「そんなことないわ。あなたがどうしているか、わたくしも、ギアも、心配していたのよ？」
「ギアのそれは知っています」

くすくす、と笑うと、ユゥリアは呆れたように肩を竦めた。

「ロザに報告させていたのね」

そうだ。王都に帰らずにいた間は、弟のような魔導師ロザヴィンと連絡を取りつつ、それとなく状況を聞き、ギアの様子は聞いていた。また国内の情勢、政情は、魔導師団長ロルガルーンから聞いていた。

「ロルガルーンから、このところはめっきり姿も見せないと聞いたので、そろそろいいかなとは思っていたんですけどね……読みが甘かったな」

「いいえ。確かに、まったく姿を見せなかったわ。むしろ人を避けて暮らしていたのよ。それが、あなたが帰って来たことを知ったとたんに、これよ」

「うーん……わたしはよほど嫌われていますねぇ」

まあ嫌われるだけのことはしたのだけれど、と唇を歪めて自嘲気味に笑う。

「ねえ、シゼ。本当に、どうする？」

「呼出には答えますよ」

「そうではなくて、これからよ。ただ一度の呼出に答えるだけで、すべてが終わるわけではないわ」

「そうですねぇ……」

さてどうしようか、と考えても、浮かぶ答えはない。むしろこのことは、ずっと考え続けても答えを見つけられず、時間が問題を解決してくれるかもしれないと、半ば放棄していたことだ。逃げてい

たツケが回ってきたのだろう。

「ユゥレンは、どうしていますか？」
「ユンならだいじょうぶ、あの子ももうひとりではないの」
「おや、それは初めて聞きました。お相手は？」
「その扉の向こうに、レムニスと一緒にいるわ」
「……なるほど。では、情報は直ちに伝わりますね」
「ええ。だから、わたくしたちのことはいいわ。今はあなたよ」

真っ直ぐと見つめてくる姉に、いったいどういう顔をして答えればいいのか迷って、けっきょくシィゼイユは張りつけたような笑みを浮かべてしまう。嘘くさいそれに気づかれないわけもなく、ユゥリアの眉間には皺が刻まれてしまった。

「わたくしを誤魔化そうとは、いい度胸ね」
「や、そういうわけでは……」
「あなたのそれに気づいているのは、ギアだけではないのよ」
「……さすが姉上」

言うまでもなく、姉は姉だった。弟の嘘など、きっと初めから見抜いていたに違いない。だが、最初からその笑みが嘘だったわけではない。自然と、笑みが嘘くさくなってしまっただけだ。処世術、と言えば聞こえはいいだろう。

「……本当は、片づける、と言いたいのだけれど」
「ああ、それは無理だとわかっています」
「そのせいで、あなたにはずっとつらい思いをさせているわ」
「それなりですよ。べつに追われているわけではありませんし」
「あなたが笑って帰ってこられる故郷にしたいわ」
「今でも充分……と、言いたいところですが、それも無理でしょう

ね。ここは、わたしを嫌う者の存在が、大き過ぎます」

留学を期に、城へ帰ることは二度とないと思っていた。帰るつもりもなかった。もし帰ることがあるとしたら、それはギアを迎えにいくときだけだろうと思っていた。もちろん、今も帰ったつもりはない。ただ姿を見せただけだ。ここはもう、シィゼイユにとって帰る場所ではない。

「姉上には申し訳ありませんが……ギアを迎えたことですし、わたしはレウィンの村へ、帰りますよ」

「……今あなたが帰りたいと思う場所は、そこなのね？」

「本当なら国外へ出たいところですが、ギアが、いますからね」

「あなたをここに留めているのは、ギアの存在だけ……寂しいわね」

わたくしは姉なのに、と言葉通り寂しそうにユゥリアは微笑む。力になりたいと思ってくれているのは嬉しいが、それはユゥリアを困らせるだけで、たくさんの迷惑をかけることになる。それはシィゼイユにとってよしとできることではない。

「また逢いに来てくれる？」

「わたしにとって、姉上はずっと姉上ですよ」

「……なら、いいわ」

ユゥリアは机に広げている書類の中から、一枚の紙を取り出して、シィゼイユに手渡してくる。

「あなたに、魔導師をひとり、あげるわ」

手渡された紙は、シィゼイユとギアの、婚姻書だった。

「それと、もう一つ」

もう一枚、別の紙を手渡された。内容に目を通して、思わず目を見開いてしまう。慌てて姉を見やった。

「姉上、これは……っ」

「今はなにも言わないで」

「ですが」

「シゼ。今は黙って、それを受け取りなさい」

それは、姉としての言葉ではなく、女王としての命令だった。だが、素直に受け取ることもできない。

「姉上、わたしは……」

「いいのよ、それで。わたくしには必要、というだけのことだから」

「……持っているだけで、いいと？」

「ええ。だから、黙って受け取りなさい」

ただ持っていろと、ユゥリアは言う。言葉を変換するなら、押しつけている、ということになるだろう。素直に受け取れない、いや受け取りたくないものだが、女王として命令してきた姉の気持ちを考えると、それを無碍にもできない。

シィゼイユは深く息を吐き出すと、受け取った紙を二枚とも、くるくると筒状に巻いた。

「わたしは見なかったことにします」

「かまわないわ。その事実を忘れても、いいわ。ただ、これだけは憶えておいて」

「なんですか？」

「あなたはわたくしの大切な弟よ」

「……わたしにとっても、姉上は大切な姉上ですよ」
「ありがとう、シゼ」
「こちらこそ」
にこ、と自然な笑みが顔に出ると、ユゥリアも安堵したように柔らかく微笑んだ。

１４　：　嫌われるだけのことはした。２（前書き）

＊シィゼイユ視点です。

１４　：　嫌われるだけのことはした。２

せっかくだから、と久しぶりにユゥリアと長話をした。ふたりきりでそんな姉弟の会話をしたのは、留学すると決めたとき以来だ。部屋を辞するときには、もう二度とこんな機会はないのかもしれないと、ありもしないことを惜しまれるくらいだった。もともと姉弟仲は昔から羨ましがられるほどよかったのが、留学を期に疎遠になってしまったことから、ありもしないことを思ってしまったのかもしれない。

「……シゼ」
「はい？」
「わたくしのところには、逢いにくるのよ」

最後にそう言われてから、シィゼイユは部屋を出た。すでに人工的な明かりが灯される時間になっていた。

「シゼさま」

レムニスに見送られて廊下へ出て、少し歩いたところで、前方から声をかけられた。薄暗い廊下に目が慣れずにいたのだが、声ですぐにわかる。

「送ろうか？　あんた、見えてねぇでしょ」

口の悪いロザヴィンだ。

「これくらいの明かりがあれば見えるよ。ロザこそ、いつまで隠しているつもり？」

「べつに隠しちゃいませんよ。おれの場合は視界がぼやけてるだけで、堅氷ほど見えてねぇわけでも、あんたほど見えてねぇわけでも、どっちでもねぇし。むしろ夜のほうが見え易い」

「……けっきょくわたしは、きみのそれを治してやれないね」

「は？　ああ、この体質か……べつに、面倒ではあるけど、困っちゃいねぇし、あんたがくれた外套があるから、今はなんともないですよ」

陽光に含まれる害に肌が焼けてしまうロザヴィンは、いつでも外套を羽織っている。専用の結界によって王城内なら外套がなくても平気なのだが、癖なのか脱がずにいることが多い。その外套は、昔シィゼイユが贈った特殊繊維で加工されたものだ。

「で、レウィンの村に帰るんでしょ？　送りますよ」

「いや、用事ができてね。あと一日はここにいるよ。そうだね……今はギアのところまで送ってくれるかな」

「風詠のところまではべつにいいですけど……用事？」

「先代ホーン公爵夫人に呼ばれている」

「は……先代？」

ロザヴィンは知らないだろう。いや、ロザヴィンだけでなく、ギアもきっと知らない。

先代のホーン公爵、それはシィゼイユやユゥリアの祖父のことで、夫人は祖母のことである。シィゼイユが襲爵したのは先代公爵が亡くなったとき、成人するときであったので、その頃から表舞台を去った夫人のことは、知らない者のほうが多いのだ。

とはいえ、シィゼイユはホーン公爵ではあるものの、実質的な権力はない。まさに名ばかりの公爵だ。実権を握り、所領を統治しているのは、健在である先代公爵夫人、つまり祖母だった。

「生きてんですか」

「生きているよ。だからホーン公爵領が未だに機能してるんでしょうが」

「え、あそこって陛下の……国領なんじゃ？」

「違うよ」

「なんであんたが統治してないんですか」

誰しも思うことだろう。ホーン公爵はシィゼイユであるのに、なぜ当人が公爵領を統治せず先代公爵夫人が統治しているのか。ロザヴィンのように、国領になっている、と思っている者には、きっと理解できない。そもそも、シィゼイユが本当に公爵なのか、と疑念を持つことだろう。

「え？　ちょっと待ってください。あんた、公爵だよな？」

「一応ね」

「公爵領は、あんたが統治するもんだよな？」

「本来は、そうだね」

「……。本来は？」

「わたしが襲名したのは、ホーンという公爵の家名だからね」

「……意味わかんねぇんだけど？」

まったくわからない、とロザヴィンが変な顔をする。特に難しい話しをしているわけではないのだが、なにも事情を知らない者からしたら、確かに意味不明な説明かもしれない。

「簡単な話だよ、ロザ。わたしはホーンという家名を受け継ぎ、公

爵と呼ばれる立場にはなったけれど、その実権は先代公爵夫人が握っている」
「……なんで？　公爵はあんたじゃないですか」
「わたしは嫌われているんだよ」
「嫌われてる？」
「いや、あの人は嫌いなものが多いな。姉上も半ば嫌われているし、ユゥレンも好かれてはいないかな。あの人にとってのすべては、公爵という地位にのみある」

今まで一度も、先代公爵夫人を「おばあさま」と呼んだことはない。呼ぶことを許されなかった。そのせいか、呼ぼうと思ったこともない。いつでも、公爵夫人だった。

「ユンさまもって……よっぽどじゃねぇか。知らねぇぞ、そんな人のことなんか」
「まあロザは知らないだろうね。といっても、このことを知っているのは当人のわたしや姉上、先王夫妻くらいだから、当然かな」
「風詠は？」
「話してないからね」
「なんで今おれに話したんですか」
「え、訊かれたから？」
「それだけっ？」

鋭く突っ込むロザヴィンに、シィゼイユは「ははは」と声を出して笑い、廊下を進んだ。

「ちょ、待てよ、シゼさま。その話、風詠にもすんでしょうね？」
「訊かれたらね」
「あいつの心情も汲んでやれよ……ひとりでまたぐるぐる悩みますよ？」

「ギアは面白いよね。訊きたいなら訊けばいいのに、なにに怯えているのか」
「それはあんたが勝手に消えたからでしょうが」
歩き始めたばかりの足が、ふと止まる。
「わたしが勝手に消えたから？」
振り向いて問うと、ロザヴィンは漸く外套の頭巾を脱ぎ、怪訝そうな顔をした。
「あんた、留学するとき、風詠になにも言わなかったんだろ？」
「ああ、そうだね」
「風詠はずっとそれを気にしてる」
「……ああ、もしかしてわたしが後遺症を作ってしまったと？」
「そういうことです」
ふむ、とシィゼイユは唸り、腕を組む。
「情けない話だから言わなかっただけだと、伝えたはずなんだけどね」
「それは最近のことでしょ」
「まあそうだけど」
「あんたは一度、風詠を傷つけました。その傷が、簡単に癒えるとでも思ってんですか」
「……傷？」
「風詠はずっとあんたが好きだったんですよ」
ロザヴィンらしくない真っ直ぐな言葉に目が丸くなったが、それ以上に、ギアが抱えたという「傷」に気が取られた。

「今おれに話したこと、風詠にも説明してくださいよ」
「……ロザ」
「なんですか」

組んでいた腕を解くと、シィゼイユは怪訝そうな顔をしているロザヴィンを正面から捉える。

「わたしは、そんなにギアを、傷つけたかい？」

そのとき自分がどんな顔をしていたかなどシィゼイユにはわからなかったが、ロザヴィンが驚くくらいには、笑みがぱたりと消えていたようだ。

「答えておくれでないか、ロザ」
「……真面目に言ってます？　あ、いや、真面目だよな……笑ってねぇシゼさまなんて滅多に見ねぇし」
「ロザ？」

答えを急くと、ロザヴィンは深々とため息をついた。

「おれが、言えた義理はねぇですけど……あんたのせいで風詠が臆病になったのは、確かですよ。おれはときどきあんたに風詠の様子教えましたけどね、教えたときにも言ったように、風詠は自分を隠すのが上手いんです。おれがあんたに教えたこと、ぜんぶが本当のことだと、思わねぇほうがいいですよ」

ロザヴィンの、これは素直な忠告というか注意に、シィゼイユは小さく息を吐き出す。

そうか、と頷くと、歩みを再開させた。

「シゼさま？」
「ねぇロザ」
「はい」
「想像してごらん」
「はい？」
「相見えたその瞬間に、おまえは誰の子だ、と問われることの意味を」

ハッと息を呑む気配が、後ろからする。
シィゼイユは、流すようにロザヴィンに視線を向けた。

「それが、わたしが消えた理由だよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6142u/

雨降る天に涙した。

2011年12月11日01時54分発行